

川の柳の雑話

麻生路郎★主宰

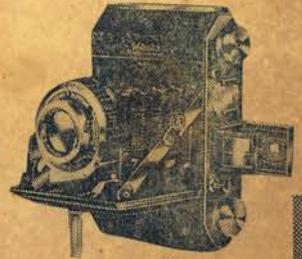


一月號

Pensoj flugas trans la land-limo

セ・ミ・ノ・タ

代表的國産カメラ



カタク星
(要部券十銭)

プロニー
16枚撮り

II型 F4.5付
¥ 117.00

F3.5付
¥ 141.00

距離計
¥ 21.00

浅沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壘代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・

組立式各種・薬品・食

料品・菓子等の容器と

して最適



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 (五八〇二番
五八〇三番
五八〇四番)

祈戰 願勝

大阪護國神社
住吉神社
大鳥神社
山東三社巡拜
熊野三山巡拜

南 海 雷 車

蒙疆風景(岩崎柳路攝)



不朽洞句抄

麻生路郎

捷つ國にその片意地が役に立ち

口先きの志士のひそりこなる勿れ

旅などはもつての外の父となり

憂國の一錢二錢貯めんこそす

祖國あるのみ旋盤工となり

布施家の慶事

その父のよろこび夫唱婦隨なり

狂路を悼む

妻の手へ句帖を遺し子を遺し

千歳を悼む

ただ一人この寒空を西へ立ち

川柳雜誌・一月號目次

表紙 (雪を滑る少國民)……福井哲撮影

武玉川研究(二〇)……梅本 摩山 森子 東魚(一〇)

草木徒然……西田 柳樂(一〇)

初等川柳講座(一一)……麻生 路郎(二)

筆隨丹波の餅を語る……小山 文三(三)

川世 界 史(二〇)……戸田 孤蓬(四)

語源覺書(一)……淺田 一(三)

日おくれの夕刊……澤田四郎作(六)

簡易生活に關して

(その一) 西三・波夢遺・五健・生々庵・水車

(その二) 文三・翠光・文庫・三福・豆秋・白峰

(その三) 山雨樓・夜王・吐空・正柳・孤蓬

ざつびつ……水客・曉明・紫香・綠之助(三)

ろ邊せい語……安川久留美(六)

不朽洞句抄……麻生 路郎(一)

近作柳稿……麻生路郎選(七)

川柳塔……麻生路郎選(六)

同舟近詠……諸 家(五)

一路集……石曾根民郎選(六)

各地柳壇……(七) 廻轉椅子(七)

川協・柳界展望……(七) 廻轉椅子(七)

社關係の人々……(三)

蒙疆風景(扉)……岩崎柳路撮影(一)



初等川柳講座 (二)

麻生路郎

新年吟とはどんなものか

先づ新年吟とはどんなものか——と云ふことから決めてかからうと思ひます。一般に新年吟々々と呼んでは居りますが、新年吟と云ふのは新年を詠んだ句と云ふ意味なのか、新年に詠んだ句と云ふ意味なのか、それとも新年を詠んだ句も、新年に詠んだ句も共に新年吟と呼んでゐるのかをこのところがハッキリしてゐないやうであります。そんなことはどつちだつていいではないかと云ふのが従來の川柳人の考へ方であつたのかも知れませんが、イヤ、今でもそう考へてゐる人たちが多いのではないかと思はれるのであります。

があつて、その季題で詠んだものはすべて新年吟だと云ふ風に解釋すれば多少共ハッキリするかも知れないのであります。川柳には季題と云ふやうな約束が無いのでありますから、新年吟と云ふ言葉も考へやうによつては、その意味が漠然とするのであります。安藤幻怪坊氏(故人)が明治四十三年に「川柳叢事記」といふ本を刊行して元日、門松、雑煮、屠蘇、數の子と云つた風に古句を分類して居りますが、これは俳句の季題を眞似て分類したものに過ぎないのであります。そして後人も又分類句集編纂の際多くはこれに倣つてゐるやうであります。これは俳句のやうに季節的自然感を詠む作品の分類には妥當かも知れませぬが人情美を句の重點とする川柳に於て、俳句の分類法をそのまま襲踏すると云ふことは

全く意味のないことであります。そんな分類の仕方も、して出来ぬこともないといふ程度位ひのものであります。しかし、この歳事記式分類の方法も幻怪坊氏に始まつた譯ではなく、それ以前に於ても行はれてゐたのであります。

「誹風柳樽拾遺」などでは春之部、夏之部、秋の部、冬之部、賀之部、離別之部、羈旅之部、戀之部、哀傷部、釋教部、神祇部、故事、戰場部、青樓、長歌、鄙ぶり、思はせぶり、戯場、雜と云ふ風に、極く大まかな分類の方法を採つて居りますが、まだこの方が歳事記式分類よりも簡にして要を得てゐると思ふのであります。川柳の分類と云ふことにつきましてはここではこれ位にいたしまして置きます。そして、もう一度新年吟のところが話をとどめます。

は歳末の句を詠むべきであつて歳末に新年の句を詠むといふことは、かなりな句が出来たといつても能因法師の故智を學ぶに過ぎないことになりま。

初詣でまだ搦手をふせて (路配)

と云ふ句は頭だけが春を迎えてゐるに過ぎないで、内容は「ぎざぎざ」の歳末風景を詠んだものであるから、初詣の文字に囚はれて新年吟とすることはないかと思ひます。

俳人などは、晩秋の頃に、新年の季題を平氣で作つて居りますがこれは新年號を飾るためのジャナリズムの甚しい弊であるといふはねばなりません。眞に迫つた名句が出来やう筈がありません。眞に名句であるならば、新年に詠んだ句が、二月號に發表されやうと、三月號に發表されやうと一向差支のない筈のものであります。新年の讀者をあて込んで、その時季の句を、その時季でない時に作ると云ふことは至難でもあるし、滑稽でもあります。この點は、俳人たちが全く氣づかないのではないのであります。ジャナリズムの大きな力に引きづられてゐるのであります。しかし、そうした弊は、川柳の方にもあるにはあります

が俳句ほど季節感に煩はされないで、作句練習のための課題吟による變則的なものをのぞいては稀にしか見ることが出来ないであります。

従つて、いかに新年に詠んだ句であらうとも、轉業に際し轉業を詠んだ句、結婚に際し結婚を詠んだ句は新年吟ではないのであります。要するに川柳の新年吟とは新年に、新年を詠んだ句だといふことになる譯であります。これで私のいふ新年吟の意味がハッキリしたことと思ひますので次に現代作家の「新年吟」を挙げ、その一句一句から、作者が新年に際してどんなことを感じ、いかにそれを表現してゐるかといふことを検討して見やうと思ひます。

- 凡聖一如元旦のころ知る (路配)
- 元旦だ一二の三て跳び起きむ (豆萩)
- 見なれたる山河であるが初日の出 (五徳)
- 母はかり使ひ過ぎたりお元日 (縁之助)
- 元日も鶏は稼いで呉れまし (前二)
- 福壽草松にしたがひ候かしこ (霞乃)
- おとがひも浸けて初湯のちと溢れ (閑生)
- あれしきの事恩に破る年賀状 (公二)

七日過ぎ出したから来た年
賀状 (愚平)

松の内屏風をたたむ風をう
け (日車)

松の内飯櫃までが汚なすぎ
(雨町)

まだまだありますが、これ
位にいたして置きます。

「凡聖一如」の句は私の句
であります。凡聖一如は佛語
で、「ぼんしょういちにによ」と訓
みます。元旦のあすが
すがしい厳肅な氣持は、凡人
も聖人も同んじだと云ふこ
とを知つたといふのでありま
す。同時に金があらうが無か
らうが、元旦の朝の氣持は又
格別なものだと悟つたころ
でもあります。

偉い人には何んでもないこ
とでありませうが、凡人の私
がこの境地へまで来るには、
なかなか容易ではなかつたの
であります。いろ／＼と世間
の苦しみを苦しんで来たので
あります。この句の出来た
新年に漸くこまで辿りつい
たのであります。

「元旦だ」の句は、作者の
新年に對する新しい希望が
躍動してゐて、實に朗らかな
環境を詠つた句であります。一
面過ぎ去つた幾とせの波
瀾重疊が偲ばれないこともあ
りません。そして今年こそは
と云ふ意氣の燃ゆるものが、
「一二の三で飛び起きむ」の
句に感じられるではありません

んか。しかも厳肅な元旦に對
して作者の斯うした表現は作
者が、いかにも生真面目であ
るだけに、思はず微笑を洩ら
す滑稽感が伴つて居て、まこ
とに新春らしいうれしい句で
あります。

「見なれたる」の句は、作
者の新年に對する新しい心
構えが、すべてのものを新ら
しくしたのであります。見なれ
た山河はもとより、見なれ
た山河から差しのほる見なれ
た太陽も、今日は初日の出と
しての歡喜に充ちてゐること
を詠んだのであります。

「母ばかり」の句は、作者
のしみ／＼とした氣持がよく
出て居ります。喰べることに
着ることに、實際母の手を煩
はさぬものとは何一つとし
てないのであります。殊に
元旦にはその感が深いのであ
ります。去年のままの姿で世
話をやいてゐるのは、母親ば
かしかだと思つて感謝せずには
ゐられないのであります。

「福壽草」の句は、日本古
來の女性らしい女性の姿を盆
栽の福壽草に發見した句であ
ります。どつちかと云ひます
と、福壽草に限らず植物を川
柳に詠むといふことはなかな
かむづかしいのであります。こ
の句など、女性の手紙の形
式を藉りて巧みに詩化したと
ころ、特に効果的な表現だと
云へるのであります。

「おとがひも」の句は、願
まで浸るころのゆとりが、願
いかに初湯らしいのどかさ
をあらはしてゐます。この句
は願がヤマであります。

「あれしきの事」の句も「七
日過ぎ」の句も共に年賀狀を
詠んだ句であり、共に穿ちの
句であります。前句は一寸し
たことを思に被て、いつまで
も年賀狀を絶やさぬ人情味を
後句はそれとは反對に出した
から来たといふ嘘禮を詠んで
ゐるのであります。

「松の内屏風をたたむ」の
句は廂の深い家に住んで、行
儀作法や物質的な餘裕に束縛
されてゐる人の生活が、黒ず
んだ六枚折の屏風によつて巧
みに描出されてゐるのであり
ます。正月といふものに軽い
疲れを感じホツトしてゐるさ
まが、うけとれるのでありま
す。

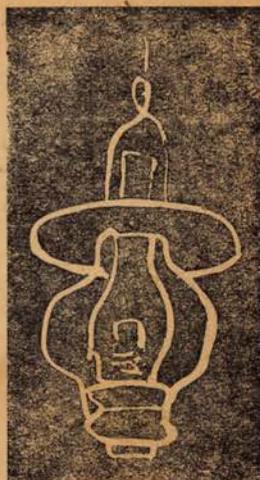
「松の内飯櫃までが」の句
は、殊に綺麗であるべき筈の
飯櫃を汚ないものとして扱つ
たところに、なんとなくをか
たみが出てゐるのであります。
日常は薄汚れてゐても、何ん
の氣もつかずにゐたのに、正
月には何かと新調されるので
フト飯櫃の汚さに氣づいたの
であります。穿ちの句として面
白いと思ひます。前句の「松
の内屏風をたたむ風をうけ」
とこの句とは、同じく松の内
の家庭生活を詠んだ句ではあ
りませんが、この句の方が句品
の低いことを思はされるので
あります。句品と云ふことは
單に、新年吟に限つた譯では
ありません。作家自身の人格
のあらはれでもあります。か
ら、常に句品の高い句を作る
やうにつとめなければならな
いのであります。

次に、古川柳の新年吟に就
て少しく述べて見やうと思ひ
ます。古川柳の新年吟は多く
は穿ちの句であり、可笑味の
句であります。
例へば
人並にいい春といふつらい
事
といふ句があります。實に
痛い句であります。
たいがいししろと數の子ひ
つたり
といふのもあります。鹽麩

豆や落花生と同じで、ある限
りバクツクこと、今も昔も變
らないところが面白いと思ひ
ます。
下戸の禮四谷あかさか鞠町
これも穿ちの句であります
川柳では下戸は随分みじめに
取扱はれて居ります。筑波風
の吹きすさぶ江戸八百八町を
禮廻りした下戸が眼に見える
やうです。下戸が漸く引ツ張
りあけられたさまを

餅網に引つかかつて下戸
の禮
と詠んで居ります。唇が紫
色になり、顔色は蒼ざめてゐ
たことせう。
かるたを詠んだ句では
藏せつけて亭主とかはる松
の内

といふのがあります。かる
たを詠んだ句は随分澤山あり
ますが佳吟は稀れです。古川
柳を通して、かるたのうまい
のが嫁、下手な代表が下女、
その次が乳母であることを知
ることが出来ます。この「慶
せつけて」の句も、女房がか
るたへの出陣であることは云
ふまでもないのであります。
古川柳の新年吟を味ふため
には、どうしても江戸時代の
正月の行事を極く大雑把にで
も知つておかなければ、意味
の解し悪いものがあります。
殊に地理、制度、風俗、習
慣、人情と云つたものの一般
位は知つてゐないと、全然間
違つた解釋を下すことになり
面白どころの騒ぎではない
のであります。



簡易生活に關して

—(その一)—

終始一環

大阪 井上湧三

かつて少年の頃の憶出だが、戎橋の下を流れるあの清瀬川を下肥の舟が朝餉の飯を炊きながら下つてゆく姿をみたことがある。一幅の圖にしては全く鼻もちなぬ風景であるが、蕨舟の上のあの炊爨が當時の子供心に笑へてならなかつたものである。まこと人生に終始あり。

その縮圖ともいひたい態を私はその後伊太利に遊んだ折、圖らずも亦異國に之をみたのである。そこはナポリの港、日本人經營のホテルへ投じた時のことである。それは一疊半數位の厨房の中、料理臺を前に恰度腰をかける位置に便所が設けてある勿論洋式だが用を足さぬ時にはその木蓋を下して忽ち椅子に便ふのだから愉快である。水洗式だから何が不淨だと云へばそれだだから面白くない。蓋してのママ事だから面白い。時局下一環作業といふ言葉が魅力をもつやうになつたがこれこそ終始一環を實踐した適例で徹底したこれらの生活をみると吾々の簡易化の努力たるやまだ一、遠いと云はねばならぬ氣がする。

修に一層水洗式にせよとかいふ舊來のまゝでゆけだのと種々と來る人が親切な説を吐いてくれる。殊にこの儘設はこの頃の様な世態には榮華を作つてせめて自分のものをこゝへ再起奉公せよと罵つたといふのである。全くもつて笑へない話に聊か感ほざるを得ないでゐる。

二六〇二年東亞の黎明が近づかうといふのに初頭から眞面白くもない話だがこれも亦一環だ。だが聊か諸君鑄後を何とんと頑張つてみる心意氣だけは忘れないでゆきたいものである。

沖釣

橋本波夢造

つた一日丈の事ではあるが沖へ釣りに出かけるのに、すつかり炊事道具を持ち込んで出かける事がある。その前夜の用意の繁雑さからして既に決して簡易生活の話ではないが、小船中の沖での一日はかなり面白いものがある。

午前五時頃から早くも乗り出す小船、見渡せば飯櫃の横に下駄があるかと思へば餌のこかい桶の上に餌が置いてある。乾から用を足す竹の筒は水桶と並び牛肉の竹の皮包は炭取りの中に這入つてゐる(斷つて置く

め。此方も先方も先を急ぐ身の夕方船宿で拂ふとして又走り出す。やがて朝飯である。船先では七輪に火をおこす。マッチに新聞紙で十分火がつく。何しろ速力がついてゐる船の事だ。風がある。團扇であぶく、ひちりんの騒ぎぢやない。直ぐにカッ／＼となり茶瓶がシュン／＼と云ひ出す。一方今のハマチはもう船の床板を一枚裏かへして組にして料理されてゐる。

「朝から刺身はどちやいッ」と船頭の聲。オツと大賛成と早速に用意のわさびをおろし金で磨る。洗ひ水は乾から一寸手を出せば無限にあるし、臺所から出来る芥は御配なく海の中へ。

おろし金、庖丁、辨當箱の蓋などを海の中へ落し込んで家人にブツツかれる事も幾度か。腹がふくれると眼の皮がたるむ。朝の早起きと酔心地も手傳つて又ころりと仰向けになる。

木偶まわし

松山 前田 五 健

或年の或冬發電所關係の事て山奥へ出張した。宿屋などは無い雪の山中故、地主と村役場のお世話で一農家へ御厄介になつた。槽の火、山鳥の汁、腹がふくれたら、そのまゝ其處へ腰よと云ふ簡易さ、フト耳にした嗚響を何んたと聞けば、汁の匂ひに寄つて来た狸でんせうと云ふ。

成程我々でもイ、匂ひをさせると犬や猫が寄つて来る。炭も薪も米麥も、魚はヤマメを川で肉は狸、兎、山鳥、自給自足、衣住も簡易實際的のものばかり羨やましい限りである「旦那……デコを廻しなさんか」淨りりのあの木偶かと頭を掻くと、あまり甘くないかと云ひつゝ、竹火箸で突き差した大焼餅……寒くなるにあの山の農家を思ひ出す、あの息子もイ、兵隊さんに成つて居らふ、娘さんも勿論……山村農家の新年雪と槽火、デコも盛んに廻はすだろ。

學生の頃

大阪 中島 生々庵

私の中學三年生時代の話。九州の片田舎で山の中腹交通不便な所に中學校があつた。家から通學して居ては勉強の時間が不足だと云ふ理由で父に迫つて學校に近い一軒の草家を借りて貰つた。尋常六年生の従弟と二人、食糧は、土曜日毎に家まで一週分を取りにゆくと云ふ父との約束で二学期の初めから自炊生活が始ま

つた。賞分の間は物珍らしさとよあに三日坊主だよとの父の言葉に反抗する氣持ちも手傳つて食事にも工夫したり望も小さく掃除したりでやつて居た。家賃は二圓六十錢井戸もなければ風呂等勿論ない六疊二間だけ。云ひ忘れたが便所はたしきつて居たと記憶する。炊事は二人で交替にやる。一丁半程の所に水汲みにゆくと十日に一回位は村の共同風呂の當番があるのがつらい日課だつたがだん／＼生活の要領を覺えたと云ふのかルズになつて来て鍋釜を日曜まで洗はぬのはまだいゝとして碗や皿をさへ一週間に洗はぬまゝ無精する様になつて試験でも近まる

と一層ひどい生活になつた。三学期末も近づいた或る土曜日の事だつた一週間の食糧を貰ひに行つた従弟が持つて歸つたのは一聯のめざしと味噌とお米だつた。もうその頃は却つてこんな簡單なのを喜ぶ様にさえなつて居たのでござして不平はなかつたのだがその晩猫に荒されてめざしをすつかりやられて終つて居る翌朝の光景には何かなんでも呆然となつて終つた。朝味噌を飯になすりつけて食べる、晝の辨當にも味噌を入れてゆく、夕食にベコ／＼の空腹で歸つて来て山海の珍味は味噌汁けである。こうした生活が三日程続いた頃に……さすがにへこたれ氣味だつた然し妙なものでその週の終り頃には朝晝晩と味噌味噌味噌の生活にも馴れて割合平然と食卓に向つてよこれた碗でうま／＼に頂いて居る自分を見出したのであつた。恐らくもうこゝろした生活は再び来ないだらうとこゝろの懐しい簡易生活の思ひ出である。

苦力のこゝ

奉天 吉田 水車

一通りの世帯道具、と言つても我々から見ればホンの形ばかりの鍋釜類をふとんにきりきりと巻いてつまり道具の巻きすしをこしらえてそれをかついで何處へでも行く苦力の姿は滿洲ならでは見られないが、彼等から教へられるものが多い。しかし之等は生活其物の簡易化であつて其處には文化的要素即ち智的なものはない。全く原始に近い生活ぶりである。そして彼等は上記の巻すしをかついで何處へでも旅行し何の不満も無く見える——不満や要求はあつてもそれがどうにもならないから諦めて居るのかも知れない。これも何かを教へて居る。所が今日大いに叫ばれてゐる簡素化とは原始にかへれと言ふ意ではないが、少くとも文化的の爛熟から来た生活態度の無批判に呼びかけられたものとすれば苦力の生活に或程度考へさせられるものがあるのではなからうか。

フオークの背中

大阪 武部 香林坊

この頃の生活は全つて落付かぬ暮したとは思はないか。外米の冷飯をフオークの背中で掬ふてゐるものとかしさを感してはゐないか。急用の中途近くの食堂で食事をしたと思ひ給え。鮮やかな手つきでフオークを執りばら／＼の御飯を掬つて見るが容易なことではすくえない。食堂の方

ではスパン一本添えて呉れる親切があつてもよさ／＼である。又客の方もスパンを要求すれば食べよのであるが一向に要求しない掬ひ難い奴を焦るながら中平氣を粧つて上手に顔をしかめながら食へてゐる者さである。生活は簡素になつてどこか斯うしたさ／＼いな事に益々複雑性を加へて来た。筆筒や本箱の代用として筆箱を用ひ、衣料を作業服二着と腰間着一枚常着一枚と外出着位に限定するものも簡素化に違ひない。それに寢床は何時何ん時でも飛び込める様に敷つ放しにして置く生活法といふのもあるらしいが、それも仲々樂にならぬ。又經濟界方面ではあるが簡單にする爲に手續と事務的の方面で繁雜になるといふやゝこしい現象である。生活の簡素化は個人的の事に計りこたわらず、これに社會性を持たせたい。少しは智的な簡素化が望ましい。吾々は川柳を通して人生を識り自分を識らねばならぬ。吾々は川柳の省略法を通して自分の生活と社會生活を簡素にせねばなるまい。そしてそれを隣組に及ぼし社會に及ぼしてお互ひの間に於て生活の簡素化を計らねばならぬ。一つの學問を學ぶ以上、一つのことを行はねばならぬ。行ふことをぬきにした學問は凡そ意味を爲さぬ。何時迄もばら／＼の飯をフオークの背中で掬つてゐてはならぬ。

丸藥一つ

大阪 田中 風葉

生活の簡易化、即ち食料の簡單化？若し假に要素の總てを含む仁丹位の食料が有りとする、その四五粒の服用で發熱瀉腹感共に満足せしむるとすれば何と云ふ簡易化であらう。主婦の行列買、暗取引又燃料の解決ともなり配給所の人的資源の重産への移行等々其の及ぼす所大なりと云はねばならぬ。全日本博士諸氏の戦時下緊急問題解決を望むや切である

院長 醫學博士 井尻辰之助

泌尿器科 皮膚科 華陽堂病院

大阪市南區千年町(島之内警察署横)

電話南(7)四四七五・二二一八五番

塔柳川



路郎選

張室口 岩崎柳路

無邪氣な妓だと一人笑つて歸るなり
或る席で亡き娘の様な妓と座り
飯店のボーイチツプへ聲高し
御時世だ報酬を當てにとも云へず
コスモスの散る頃風邪をひきました
敵性の眞の煙へ氣がひける

戸屋 寺井 鋭 々

街路樹の散るを巡查の見てゐたり
吊り革を持つに洋装ためらはす
學問と別な眼力父は持ち
育兒法夫案外調べてる

白い手が作つた菜の葉味はれ
野菜作れば野菜に虫のあるを知り
月曜の事務所で鉄瓶見せてゐる
零落れたが辯護士口調まだ抜けず
税金を知らぬ家族の伴せき
水漬が落ちたを女見つけたり
速達が三回ほど来る師走

手帳ポロ／＼十二月なかば
大阪 戸田 孤 篷

愛國百人一首素顔と素顔向ひあひ
技術史は妻の苦勞へふれぬなり
世話好きの師走ドブ板ふみはずし
宣傳へ教師そのまゝ信じたり

兵庫縣川西町

戸倉 普 天

屋根看板も持つて産婆の引越しし
オ、君も同ンなじ汽車か東京驛
食堂で遇へば名士の老けて居る
リヤカーに嫁乗せて行く田のせわし

尼崎

水谷 鮎 美

勸題農村新年
聖壽萬歳農具に七五三飾り
倉敷温泉に通ふ
はちまきがほどけて温泉はいゝかけん

兵庫縣

西川 青 美

落葉焚く下社の杜はやがて寝る
長野縣食堂にて(盲學校修學旅行)
がらあきを知らず盲生狭う掛け
古風な宿屋坂道に遊ぶ
象山がほめたであらう宿の軒
百八尺の金佛銅

諏訪湖

献納も慈顔に諾けて空高く
志賀高原散策

唐松の落葉、毛布やうにふみ
千古の森林、王子が買ふ
原始林新聞紙は盡きはせぬ
外客誘致の山國

アルプスも人もスイスの長野なり

柏原・一茶の墓は明専寺裏、杉林の中
雑居して一茶未だに詠みつらん
赤倉ホテル・この山上にこの蘇華

よくもまあ魔術によらでこのホテル

ざつぴつ

増産計畫の噺

大阪 西尾 栗

箸紙が今年もふえた面白さ

斯う一句、出来た時は年子で子供が四人出来ました。男一人に女三人といふ割合で、些か増産計畫も狼狽氣味です。或夜、家内ともう一人男の子が欲しいと言ふ話から、「今のままでは、七割五分のスパ入りやないか、時局柄スパは致方がないとしても、六割位でとめとかなとなア」と言ふたに對して、「七割五分のスパとは、アナタ、何ですの」との頭の悪い質問をしてくれました。柳人の家内として、以てユーモアを解せんも、マコト甚だしいと言ふべきです。「四人の子供の中、三人迄女なら七割五分スパ入りといふ事やないか」「へえー、そう言ふ意味でしたかいなア」「うん、そりや」「然しそりや違えしまへんか」「なんでやいなア」「女の子はスパと違ひまつせ」「そしたら何ぞ」「純めんですがなア」「どつちが頭が悪いのか、自分はヒタイをトントンと叩いてみました。
或夜、又こんな事がありました。「男一人に女三人やつたら、ワンストライク、スリーボールといふ事になるなア」「そりだんなア」「今度、女の子やつたら、フワポールやなア」

神祕境界黒部

宇奈月にたゞ洋館の無かりせば

湯谷關も物ならず

千仞の谷は黒部にあつたのだ

錦繡の美筆舌に盡せず

西陣も及ばぬ秋の黒部なり

温泉宿

断崖へチヨコンと宿が留まつてる

理性は消え羽化登仙の思ひ

電力を話す人なしたゞ見惚れ

金澤・市場スケッチ

氣がつけば服を着て買ふは俺ひとり

百貨店所見

寒國はネクタイまでも分が厚し

山中温泉の宿につく

番頭みづから宿帳を書きに来た

大衆風呂はがらあき

温泉でひとり沓下洗つて来た

大阪 橋本 緑雨

釣自慢四五年前の事なりき

榮轉の噂をそらす東海道

曉に祈願行事の列に逢ひ

新らしき年も銃後は頑張るぞ

神國を喜ぶ春の人の群

大君へさゝける孫だと話し合ひ

麻生 葎乃

數の子のみんな育てばすごからう

かけてゐる膝おしのける隣組

長いものに巻かれよとは卑怯千萬だ

酒に數の子もあり戦へる國なるに

★

大阪 松浦 帆船

見渡せば迷彩に似た秋の山

思案する鼻へ煙草をさし出され

十二月救世軍の影もなし

場末のサーカス寫眞に象はあつたけど

尼崎

長谷川 三司

驛の裏半島人の影さむく

作文へ遣兒の鳥居の大きかり

眼役者(二句)

樂屋風呂一度にやんだ虫の聲

大見得を切つてる足に蟻がはひ

大阪 野元 吐空

風邪ひいて憲兵の聲殺氣立ち

引越して女中の力見出され

轉業の友は自然を信じ切り

初雪にピルの高さを仰ぎみる

事件屋がジャンパーで行く冬の街

大阪 宮田 不二

友情はよし北海道の鮭の味

待つこと久しやがて貸切車の通過

いゝ名前重軽傷者の名に見付け

貝類はキツプの要らぬ口をあき

川口 伊古田 伊太古

衝立の虎に兵士の擧手の禮

何も無いあとは黙つてくさや出し

雑草でいゝよ俺の子雑草で

下意上達社長カン／＼怒るだけ

新百人一首紙背に赤い血の滲み

大阪 池水 湖心

天津にて

膠皮が天津の街歩かせず

註(膠皮は洋車の天津方言)

姑娘の靴音輕き王府井

王府井(北京銀座)

大阪 市場 没食子

行く一家國旗の下で寫される

「こゝもと、ピッチャー、サイン極めて慎重といふことだんなア」

「そりや／＼キヤッチャーしつかり頼むで」

「然しフワール出しなはつたらピッチャー交替といふ事になりまつせ」

「ワッハハハハ」

因みに自分は養子でありました。

從兄弟の端くれ

徳島縣 姫田夕鐘

「娘」 お父ちゃん大阪から知らん名前の手紙が来たぜ

「親父」 思ひ出せぬほどの親類からやろ此の一、二年前から從兄弟の端くれとか何とか云ふて何十年も顔も見たことの無い奴から、ぎょうさん無心を云ふてきよるな

拜むから手を送れとか茶菓を送れとかぬかして

「娘」 ほんまにな

「親父」 此の間の様にお百姓様々と書いちゃうんだらう

「娘」 それにしても近頃ぎょうさん親類が殖へたもんやな

近頃常會風影

大阪 夷 一笑

農村の常會はいつも肥料の配給と増産を結びつけて問題にするし、料理屋飲食店の方は酒砂糖の配給が問題に上る。これ等の事には凡そ關係のない都會住宅街の常會では野菜や

洒落多く實力の程疑はれ
うちの子も風呂で叱られてるひとり
大戦果思はず懦夫を起たしめる
勝景の中の中なる療養所

奉天 吉田 水車

お教へじてお別れをする香具の辯
満洲の秋はのぞいただけで去に
玄關へ初傳と言ふを飾り立て

大阪 須崎 豆秋

松飾り月當番の札も下け
寶聲をわすれてしもた魚市場
ふるさとのうどんはやはり白かつた

不許董酒入山門

配給の酒は裏門から貰ひ
大根の足が出てゐるリュクサツク
五時の夕暮さて酒呑といふものは

ハイラル 宮岡 白峰

病床の或る日(二句)

體温表軍醫は後ろ向ひて書き
氷囊のまんま日課も達しとき
耐寒訓練
鳩一羽こゝにも凍死してゐるなり
十二月満洲の風支那の風

大阪 正本 水客

元旦の畑の色が尊とかり
梅生けて鏡のなかも春らしい
夜汽車までの時間を一人すしに立ち
魚市の蟹が生きてる朝はむらさき
待呆けの日は珍らしく暖かし
だし雑魚を提げて旅程をきりあける
羽織のないことを氣にして送つてき
月横に動くと見れば汽車曲る

映畫「東洋の凱歌」(二句)

とまどいの顔でマニラは起上り
物質文明の夢をベタインに押詰める
濕布して親友約束通り来る
英靈へ改札口は別に開け
ひとり來る鋪道落葉がつきまとひ
公休の車掌をのせてバスは發ち
孫抱いて今日は將棋を見るとする
買出しをこぼしてバスはゆれてゆく
朗かな話題令嬢の軍需工

黒川 紫香

映畫OK女工なかなか派手にやり
つゝましく花の師匠としておはり
愛すればこそそのねたみと何故言へぬ
をむかれた根みの日より母を戀ひ
やまいれて歸る金糸へ酒のしみ
事務服を脱けば二尺からある袂

大阪 丸尾 潮花

子を得たり(五句)
子を得たり金色の冬陽と湯たんぼと
子を得たり寒さをしかと憎みたり
こゝに一人しこの御楯のおむつかな
子の横にひと日讀まざる日を悔ひす
子を得たり煉炭の穴も楽しきかな

神戸 岡田 某人

醫商人に墮した譏りは免れず
他人肌に觸れても詰める満員車
窮屈な位置雑音の多かりき
洋装へ動物性の目を投げる
尻拭ひ出来る力を信じられ

大阪 尾崎 方正

魚の配給について兎や自云ふ。彼等
が直接生活に影響する問題で有つて
見れば當然だが、嬉しいことに債券
割當の消化や國防の問題に至つては
配給以上真剣になる。げにたのもし
きかぎりである。

これでいゝのか

石崎 柳石

街頭で目立つもの、娯樂演劇の廣
告刷物の華麗さ、若き女性頭髮のそ
れ増産に挺身する田園農村の現状と
對比して見るがよい。そこにも自づ
と戦時下の必勝體制を反映した創意
があつていゝはつた。

提案？

大阪 阿萬萬的

戀愛生活の簡易化……よろしく結
婚すべし。

今日の感謝

大阪 丸尾 潮花

妻有子無しと言ふ二級生活の私達
一日の量食が二人で四合六勺、三日
目に果物一ヶ、家賃拾六圓五拾錢と
言つても蟻の入る様な平家建しやな
いんですよ。年三度の四合のお酒を
無くするのにまあ二十日はかゝりま
すわ。たまに干バナナ位はよばれ
ますが……。
配給で足りる暮しをうらやま
れ
妻らしく塗つて二勺の酒をこ
ぎ

下開 櫻川 不水

争へぬ年か三年鶏産ます
船底で生きる蜘蛛あり張つてゐる

廣島 濱田 久米 雄

戦つてゐる職域の灯が消えず
慰安會世帯やつれの妻を連れ
十二月忌中の札に目がとまり
十二月八日こゝろの灯をともし

大阪 清水 史 路

日本の歩み歳事記まごつかせ
うつかりとして居た僕をお爺ちやん
胸のひゞ晴餅雨讀とまでゆかす
立寄りぬ譯は土産を買ひそびれ

戀もいゝ戀もいゝがと男銃を執り
お里には負けたとパーマかぶと脱ぎ

義經千本櫻園を觀る

お初穂へ豊葦原の燈を點し

新 普 察

自在釣みな元旦の艶となり

御 題

かしわまだ難です紅葉の茶屋の下

一 泰 洪 水

張りすぎたお乳をメナム持てあまし

大阪 中 内 翠 芳

何時來ても旦那は足らぬ事を聞き

天王寺の釣籠懸石

鳴らぬ鐘餘韻残して應召し

制服へ足らぬ一點借りに來た
後手を組んで焼後見てる人

借定期違つた方へ乗つて行き

下開 多田 市 多 樓

トシネル開通

海の底汽車が走つて秋の晴れ

ものごとを便り過ぎてたなと思ひ

母からの手紙奉公の字も使ひ
脱線をして冷酷な目に出あひ

大阪 夷 一 笑

神棚へ或る日財布を置き忘れ

朝露も一緒に草を刈て來る

まかれてる譯にはあらず子煩腦

白足袋をはいた男と氣が合はず

世渡りは斯くやと思ふ太鼓橋

豆炭をつゝけばすでに灰ばかり

今治 月 原 宵 明

大東亞一周年

さんご礁浦賀以來の仇を討ち

曉天動員この恰好を笑ふまい

なに氣なく借れば防諜マツチなり

骨董屋あるじ何處かで返事をし

叔摺機まだ動いてる月明り

斯かる世にまだ占師陣を張り

大牟田 高 田 抱 逸

殉職の前夜常會笑はせる

あの型が末は所長になる重み

前職をたのめば道具氣にいらす

眼帯の夜勤時局をわきまへる

株欄も見逃がし出來ぬ餘裕でき

電話きて社會奉仕へ夜も走り

中支 篠 山 籐 彦

遠雷の音にも歩哨耳とがり

トンボ蜻蛉此處も夏なり中支なり

流星か螢か支那の夜は暗か

蚊帳の色内地の夏のしのばれて

來る彈丸に頭も下けずニヤツとし

足下のしぶきは秋雨か敵弾か

模範の生活

大阪 水谷 竹 莊

「第一步は夫婦圓満から……子供が一人なり二人なり出來ますと女は益に偉くなるものです。」

「今坊がなか／＼寝つきませんから貴男すみませんが、そこを開けると干物があります、焼いて上つて下さい。」

「お飯櫃は？」

「お勝手にありますから。」

「お湯が沸いて無いわ。」

「少しぬるいかも知れませんが、それで我慢して下さい。」

「もうかうなると圓満な生活は出來ません。良人の歸りもだんだん遅くなります。もうブンブンして針仕事も手につきません。そのブンブンした顔で良人の歸りを迎へた時、その顔が良人にどう映るでせう。」

「家に歸つてもつまらない」と我が家に近づくに従つて良人が溜息を洩らすやうになります。こんな風だと自然良人は他所でいらぬ金を費しもします。」

「だがこんな時にジツト辛抱して機嫌よく良人を出迎へます。時に優しみに、深切心、愛情を我慢して負けてやる事です。良人だつて決して悪人ではありません。口に言はなくても「すまない／＼大にやるよ、俺を思へばこそだ……すまなかつた」良人は心から妻を敬する心、愛する心が起り感動的な夫婦愛が芽生え、立派な生活も出來る事と思ひます。如何？」

あゝ敵屍よお前も強い奴だつた
合言葉たよりに今日も夜襲撃

西宮 阿 萬 萬 的

齒がボロリ秋が一入身に迫る

富士山麓を廻りて

雑念などあるか富嶽を仰ぐ身に

風穴のどこかで古話が聞かれそう

富嶽だけ残して鳴澤村暮れる

同行の篠田、禪原君本年度入營

征く友へ今日の富嶽に雲もなし

西宮 谷 口 緑 葉

遅刻した序で一本喫ひつける

遅刻してこそくくとはまりこみ

仲人の脱線痛いことを言ひ

大阪 武部 香林坊

ホテル住ひしてと大きなところを見せ

一人居のホテルの鍵の冷た過ぎ

かゝる世に青年松陰など思ひ

姑が生めよ殖やせよ云うて来る

身を粉にしてと母親送つて出

町會長金を持つてただけのこと

隣組猫の被害を話しあひ

組長の疲れへ酒を分けてやり

組長のもう板につく頃に辭め

黒野氏長女昭子さん出生

産聲のこんな時局だとは知らず

爛冷めを旦那も笑ひく呑み

布地 上 田 翠 光

大晦日今年は貯金などしらべ

快い疲れ落葉に尻をすゑ

米英に興ふ

クリスマス葬送曲が聞えそう

空の神兵かくもあらうか枯葉散る

大阪 八 竹 正 柳

子澤山降りてやうやく發車する

閑兵に似て一列の横を過ぎ

ラツシユアワー詩集ひもとく娘がゐます

軍醫隊備員兵營生活(三句)

妻と子に敬禮をして面會し

面會所子供も敬禮して歸へり

起床喇叭東天紅から響くやう

つゞけねば効かぬ藥を呑みはじめ

蔭膳の寫真も星が一つ増え

止むを得ずした轉業に運が向き

休閑地兒がうろくくと抄らす

日本の女に返る冬が来た

待避所を面白がる子に泣いてる兒

がん首は今日の女將の機嫌知る

意外にも十八番を人がやり

陣頭指揮あご紐、脚、袴物々し

味噌汁が冷えると朝の休閑地

水すまし自分ひとりの波をたて

スタンドの灯で二三行読んで寝る

友達の處女出版へ肚を見せ

二十一我は海の子泳けぬ子

室咲きと云ふ身の幸を思ひみる

制服の塵を拂つて巡查老ひ

撞き納め未練は人にあるものよ

ただ産ますつもりへ明けの刻も告げ

昭南と聞いてあらたな別れなる

M先生を送る

山口縣 長 野 井 蛙

麻生アト

若狭路の山々低く、七色の紅葉は

秋陽に照りて美しく言はん方なし

三宅村に近く別れ道あり。高さ三尺

ばかりの道標の石も苔蒸して右けふ

がいでう、左もぢせんがいでう」と

若 狭 路

小 濱 村 田 眉 丈

十一月十五日。日曜日。

絶好の小春日和に心も和む。小濱

町より約六里餘の田島村釣遊區に往

診を頼まれ、運轉手を督して自家用

ダットサンを駛らす。

若狭路の山々低く、七色の紅葉は

秋陽に照りて美しく言はん方なし

三宅村に近く別れ道あり。高さ三尺

ばかりの道標の石も苔蒸して右けふ

がいでう、左もぢせんがいでう」と

と判讀される。行人なく亡身の丈よ

り高し。泉鏡花の小説にありさうな

感傷に浸る。

車は山路にさしかゝり紅葉鬱々色

濃し。田島の隘道を抜けると眼下に

日本海が開ける。まさに水天秀麗書

一覽。磯近き※「沖の石」に白く小

波がたわわれてゐる。

田島漁業組合の前でダットサンを

棄捨て、更に秋草茂る密林を村道傳

ひ、峠を越えて釣遊區に到る。戸數

十戸餘。南を受けた山腹に點在す。

柿紅葉の中に寺あり、白壁映ゆ。

出迎への人と連れだち患者に到る

病人なる主人は鹽石症にさしたる

事もなく、お土産の富有柿を寄せ切

れの袋に一杯貰つて歸途につく。

夕紅葉さらに明るく、若狭路の秋

意々深し。

征く人か胸に日の丸たのもし

見はるかす瀬路蘇聯に行く雲

か 柿紅葉庫裡に大丸髻がある

※註「沖の石」は小倉百人一首に

ある二條院讀歌の「我がそで

は汐干に見えぬ沖の石の人こ

そしらわはく間もなし」の

沖の石なりと里人は傳へてゐ



語源覺書

(一)

淺田 一

ソルチヤーと兵隊。ラテン

語のSoldatは英佛でもソリツド、ソリドで「堅」の意味だ。之が堅貨を意味し、遂に五錢白銅を意味する Soldo (伊) Son (佛) となり、「獨」に入つては「給料」となりそれから給料の支給を受けて傭はれる兵隊をSoldatと稱するに至つた。どこの國がこのことばの元祖か知らぬが伊・佛・西・葡・露・蘭は皆ソルダート又はその各國のなまりで濁つたり語尾を讀まなかつたりする程度である。英米は誰でも知つてゐる様にソルダヤードが之も傭兵でしかない。何れにしても之は全く個に對する名である。我國の兵隊は支那からの借物だが兵器を用ふる團體で全の名であり、我國固有の名としてはツハモノ(強者)がある。ツヨイともいふがツホ(ヲ)イともいふ。ツハは強である。給金に釣られて募集されるソ

ルダートと給金なんか念頭になく「大君の邊にこそ死なぬ」のツハモノとでは言語學的に見ても勝敗は明かだ。馬來では葡語に習つてソルダグヅダが泰はボヌ(力)といふことがばで兵隊を示してゐるのはたのもしい。

キングの由來。ドイツでは昔王様のことをKunningと云つたさうでオランダは今でもKoninkといふ。之が英に入つてKing、獨で今日Konigと云ふ。他方ドイツで子供のことをKindと云ふがこのKinderはラテン語のCogniに由來し「生れる」ことで、は過去分詞の語尾で「生れたもの」即ちキング(子供)だ昔は歐洲も亂倫で妻を定めて持てず、子供は授かりものか厄介者か誰の子とも判らなかつたこと今の蒙古、西藏(兄弟に對して一婦)の様であつたらしい。所が王様は妻妾を獨占して他のものに一指もふれ

させぬから子供の由來がハツキリしてゐる。このKingは由來を示す語尾で由緒正しき御子の義が王様となつたといふ。泰國と齒。日本語の齒の語源は葉の様に生えるからなどと云はれ、世界中どこにも似た音のコトバがない。ツース(英)、ツアーン(獨)、ダグ(佛)、ズープ(露)、ギギ(馬來)、イー(朝鮮)、ニマキ(アイヌ)と云つた風だがヒトリ泰國では齒をTonfアーンといふ。山田長政時代に我國から持込んだものだらう。尙涙はナムターといひ、ナムは水でターが眼だから泰ではナムターに意味があるわけだ。然し朝鮮の涙はヌンムルでヌンが眼、ムルが水であり、わが「ミツ」は此の「ムル」と同系だから「ナミダ」は寧ろ朝鮮語から來たもので泰語は一見酷似しては居ても之は偶然の一致である。

更には布團と天幕を持つて外出すれば宿屋は要らん。一層の事大八車へ屋根をつけて鍋釜、布團を讀んで、それを引つ張つて行けば借家難も解決する。と云ふ説が出た。

贅澤は敵なり

大連 佐々木 三福

都會生活を永く續けてゐる私達の口は本當に贅澤になり切つてゐた。毎日のお膳にお魚や鶏肉が附けられる事が當然であるとし、主食である御飯にしても、純米の白い御飯が當り前で、而もその御飯の色が白いの黒いのと勝手氣まゝを並べて來たものであつたが、今日から考へると、あれであまよくも神罰が當らなかつたものだと思ふ程である。然るに支那事變に引續き此度の大東亞戰爭に入つて以來、吾々國民の氣持は一齊に百年戰爭に備へる氣になり、大東亞に新しい秩序が確りと打立てられる日迄は、何が何でも頑強をそと言ふ氣構になつた爲に、今では肉が不自由であらふと、お魚が少なくなつたと又御飯に外米が混せらうと、そんな事は少しも苦にならなくなつた否之に慣れるに従つて一種の變つた味と効果を感じて來て、たれの口からも不平がましいものを聴かなくなつたのは嬉しい。それが本當なのだそれでなくてはならぬのだ、戰爭は既に第二年目に突入した、國民お互は此の昭和十八年も手をつなぎ合つて米英を打つて遂に頑張りぬき度いものである。

守り護らんこの大八洲富士の國

簡易療法

大阪 須崎 豆秋

- お餅に不自由しませんよ。
- それは又お痰やましい。
- お餅が欲しいと思へば、一日中お餅のことを思ひつめてゐますわ
- すると。
- その晩キツと夢でお餅が食べべられます。
- 而し寢てお餅を食べると、胃腸にわるいですな。
- ところが胃腸はおろか、どんな大病でも癒ろきます。
- 何かい、藥でもおまんのか。
- 家傳やさか誰にも云ひなはんや……
- 酔とこんにやくで治します。
- 酔とこんにやくでも治らん場合は？
- あきらめなはれ。

洗面器一つ

ハイラル 宮岡 白峯

私の今の生活は至極簡易だ。即ち洗面器一枚で、飯に、すき焼に、和洋料理に、それに盛澤山に出来るのも面白い。

水を開つて飯をする時なぞ、洗米の必要更になし、水筒の水一杯ですまし、味噌汁、將亦湯タンポ……雪に寝て汗に起きる昨日今日、血液迄も凍れと追る北滿は即ち大自然の冷蔵庫である。物の腐敗は向ふ五ヶ月心配御無用。でも糞所はすべて配給品のみである事を斷つて置くと共に私達は更に「簡易生活へと前進を續けて行くこと」にしてゐる。

(ハ)るからハルだといふことになつてゐる。然しギリシヤ語でホラは時、季節、春の意であり、トルコで春をバハル、蒙古でハブルと云つて居るから之等と無關係であるまい。夏は熱(ネツ)又はアツだらうといふ。トルコ語ではヤツだ。西洋でもサンマーなど「太陽」と同系である。秋は食(ケ)だとか稻刈の反切とか「飽」だとかいふが、「アイノ」語の「アキ」は「出来たる」といふ意味だから私之を拜借したと思ふ。丁度ドイツで秋をヘルプストといふが、之は英語ハーヴェストに相當し而も、收穫の意はなく英のハーヴェストに秋の意はない様なものだ。冬は「冷ゆ」の轉だ。英獨のウインタ

ーはウインド「風」から來てゐると思ふ。
西宮我さんの由來。中島利一郎氏「東洋言語學の建設」によると蛭子、葦船、放(ハナツでなくヒル、ハフル)など字に囚はれず、昔から説くと蛭子は長子(初の子)で葦船はアシハセ(行きの)船で「放る」は「蛭」とのゴロアハセであらうといふヒルは今ではピリが「終」を意味するが、「初」を意味する朝鮮語ピリユと關係がある。アシは滿洲固有語で金を意味し、アシエ、アシヤアシなどともいふ。アシハラは金國でアシギョロ(足柄)は金族であるといふ。(足柄山の金太郎)滿洲の祖先は阿什(アシ)河の邊から出たさうで「金」といふ國を肇めた。其祖先は布庫里雍順でこのブ

グリ又はプリはヒルと同系語で始(祖)の意。この民族の一部落(ハセ)がアシハセで、之と交通する船がアシブネであり、蛭子(長男の意)といつても手足が動かぬのでもなく骨無しでもなくイサナキ、イサナミノミコトの命を奉じて大陸の平定に征かれ金の始祖となられたのだらう(今建國神廟ある所以)といふ。その船は行き切りでなく、西宮アシヤ(金)浦にもどつて大陸の貨物を輸入したから福の神であり又夷の船だから夷と唱へ、御弟天昭大神と須佐之男神と共に三神(我三郎)を祭つて大國主西宮(延喜式)と申上げた。このニシは朝鮮語で主であるこのアシから金をオアシといふに至つたといふ。

一石二鳥

山口縣 長野 井蛙

決戦下簡易生活の要務は衣食住の各面に於ての喫緊事で、特に食糧の確保は戦中日本の長期に備へて我等に課せられた重大使命である。そして之が増産と節約に凡ゆる研究と努力を必要とするが、元來農を業としなない私の家庭で増産は出来なから消費節約に努力するより方法がないが、食盛りの子八人を擁し一日一人當り×合の配給量で事實一週間の食糧を五日で消費する現在之れが對策として試行的に左の如く消費の節約に全力をあげてゐる。
● 晝食 晝食は極少の米麥混用食
● 朝及夕食 少量の米麥混用食
● 辨當以外は代用食(配給の干餾餅)
● 中間食 ½パン半個と干餾餅の併用食
食糧確保の實をあげるためと所謂お

やつを兼ねる代用食は一石二鳥の効果を擧げ而も子供の發育に何等の障害もないことを實驗したので、將來も之れを續行しやうと思ふ。

社覽板

▼本社新春句會が一月十一日夜五時半より三津八幡宮(稲區八幡町佐野屋橋筋内、本館電停東一丁)で開催される。
兼題は「旅」と「残り福」
いづれも三句。

路郎主幹の講演「表現に就て」があり、石井白面人氏の漫談もあり、他に出席者全員の對抗句戰等々。會費は五〇錢。

▼不朽洞會新會員發表
布施 中村聖司氏(香林坊氏紹介)
大阪 木下幽王氏(丹路氏紹介)

慰

戰

問

線

袋

勇

を



大鐵百貨店

さ つ と 喜 ば る

武玉川研究

(二二六)

梅 本 塵 山
森 子 省 魚 二

五 編 (八)

(124) 大内人の牡丹ほど着る

省二「牡丹ほど」は、きらびやかに澤山の意。「大内人」は神官大社などに供御の物を掌る神官。

東魚「牡丹の花びらの如く、幾重も重ね着た趣。大内人は前説の如くである。」

塵山「大内人とは殿上人のことで決して官司や社掌ではない。」

省二「辭典をみれば、「大内人往古伊勢の神宮に置かれた祠職。内人は大神宮に殊に親しく仕へ奉るよりの禰といふ」とある。尙ほ「國史大辭典」をみたら「神職の一種、伊勢神宮、熱田神宮、紀伊國懸宮等に之を置く」と、而て起原沿革が詳かに載る。

(125) 抱付くと言ふハ叶ぬ時の事

東魚「口説いても、はねられた捨てばら氣分で抱付く。脈があれば露骨に抱付かずとの事である。」

塵山「單刀直入せぬところが、未

だしをらしい。

省二「其場合、抱付くより外に策はなかつたのだらう。」

(126) 美しい顔の覗く夕たち

東魚「傘借りに、久し振りの顔を見せたのであらう。」

塵山「何とも申譯がございませんとてゐた。」

(127) 手を借りて心のうごく灸のふた

省二「灸の蓋(膏藥)の處置をして貰ふ手を借りた際、愛情を感じる。戀しさを覺えたのである。「二代女」後に廻りて灸の蓋を仕替へ、鬢のそゝけを撫でつけ——灸据は日敷もかゝり、又一度の時間も要するから、親しくなり勝ちである。河東節の「灸据え」などは、据えてやるのは恩ならず、据えさせるのを恩にして男心の憎いのも嬉しき程の野暮となり、などと、虎と十郎の痴態を描寫して居る。」

東魚「手を借りるのだから、襟元

とか背中とかで、前説一代女の引例が、びつたりとくるやうに思ふ。
塵山「灸を据える時は、兎角に男女の情事を惹起し易いやうで、小説の材料にも屢々使用される。」

(128) 斯う寝たらうれしかろうと文枕

省二「枕の下に手紙を入れて置くのを文枕といふ。こうして寝たならば嬉しい限りであらう。以て其手紙のいかなる内容のものかは察せられる。」

東魚「他人への文などことづかつた者が、戯れの仕事であらう。」

塵山「斯くして寝たらば、嬉しい夢など見る事もあらうと云ふ意ではない歟。」

(129) 寶盡しにはいるよし原

東魚「寶と數へあけるものの中に喜見城——吉原も指折られる。」

塵山「異説無し。」

省二「「寶盡し」は寶物が列擧されて居るの意。」

(130) 名代の貞の向見すゆく

東魚「對手は誰なりかまはぬと云ふ顔つきで行く。顔の賣れた男のあたり人なき趣であらうか。」

塵山「前解のやうであると、一向見て行く一でなければならぬ。一向見す行く一はその反對に左顧右眈して、眞直に向を見すに行くので、私は正解を下し難い。」

省二「此句は考へさせられたものギョロ／＼とあたりを見るのでは、「名代の顔」に應はしくない。「一向見す」は向ふも見ない位だから四圍も見ないと云ふ意かとも思ふ。「名代の貞」は評判の顔、美貌、女の方かと思つてゐた。」

(131) 關の晝寝に赤ひ蚊か飛ぶ

省二「閑で晝寝をしてゐて、蚊にくはれる。威かめしい役人を買つた眞赤な蚊はみつけどころ。」

東魚「血ぶくれた蚊と關守との對照は、一寸可笑味がある。」

塵山「赤蜻蛉でなくて、赤い蚊は耳新しい。それに關守を配したのは面白い。」

(132) 盃を著て突出す乳川

省二「京の下加茂の乳川は、六月中頃から貴賤もなく涼みをなし、酒宴を催し樂しむだもの、盃を著て突出しやるなど、其の興の程も親はれる。——乳川うりもしばしはうき寝鳥(武・十三)——新撰狂歌集——六月中頃より、加茂の乳の涼みとて浴中貴賤酒肴をもたせ、森の木蔭になみりて、酒宴らんふ様々の興をつくし、暮過ぎておのれ／＼に歸りける。」

東魚「箸でつき出すは、流に浮べた盃を押しやる心持ちであらうか。」
塵山「乳川は高級の避暑地とも云へる。」

(133) ほと、きす先から先へさしミ血
 省二 初鯉の刺身だ。時鳥とはお
 約束もの。
 東魚 鳴き訪れる先きくで、初
 鯉を賞味すると云ふので、初夏の江
 戸の町が思はれる。
 塵山 素堂の句「目には青葉云々」
 の換骨奪體であらう。

(134) 今戸の橋をからくりて行
 省二 分戸橋を渡つて北國行。凡
 そ北國行には、からくりが要る。|
 「一朝歸今戸の塵にとりまかれ」
 東魚 「からくりで行」などは、
 巧みな面白い表現。

塵山 一蝶が小唄のやうに、待乳
 しづんで梢乗込む今戸橋である。
 (135) 風馬の上から呵りつけ
 省二 馬に乗つて行く際、風の糸
 が一寸邪魔になつたので、呵りつけ
 る。

東魚 漫畫的光景。
 塵山 肩で風を截る武士の態度が
 なく表現されてゐる。

(136) あさつきや脇から親へ言込せ
 東魚 上五は一出代りや一と云ふ
 程の心持ちであらう。直接でなく他
 人から女中の親元へ、結婚を申込ま
 せるので、息子がぞつこん女中に参
 つたのであらう。さりとは捌けた親
 達である。

塵山 縁談とも解釋されるが、直
 接談判では少し跋が悪い故、他人を
 以て女の親元に交渉させるのであら
 う。
 省二 いかにも、前二解釋でよく
 判る。此篇「あさつき」の句が多い。

(137) 十月を色にも出さず建長寺
 東魚 散り敷く紅葉など、掃かれ
 てないと云ふのであらう。
 塵山 十月は鎌倉の光明寺に、十

夜念佛が有る。詣人が群集するけれ
 ども、宗旨の異なる建長寺に於ては
 何の法會も無く森閑としてゐる。

省二 私 は建長寺の掃除が、行届
 いて居るといふ類詠の多いのかと思
 つてゐた。
 (138) 琴屋か手て八松風も来す
 省二 琴の音に峰の松風通ふらん
 何れのをより調べそめけん 一 琴屋
 が店先で弾いて居るのでは、松風、
 琴に通ふ事もないであらう。

東魚 一流の諧謔ではあるが、少
 しく句が浅い。
 塵山 坐五の一松風は来す一は、
 少し拙い。
 (139) 府中へ錢の廻る六月
 省二 判らぬ。阿部川が止まつた
 場合か。

東魚 夏季用の抱籠、籠枕などの
 名物が、賣れるとではないか。
 塵山 昔の六月は、玉川鮎狩の時

期で、江戸市中へ多く出荷する故、
 自然武州府中驛にも金錢が落るので
 ある。

大阪 名物
 松前布
 本舖
 赤坂橋筋
 仙前屋
 常陸中(四四)番
 電話(八二)番
 出張店:
 朝日ビル
 専門大店
 電北法四番

新發膏

消炎鎮痛濕布薬

主治効能 感冒、肺炎、肋膜炎
 氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
 ロイマチス、神經痛、打撲痛
 捻挫等

今般工キホス姉妹品として發賣したる本劑は専らその請効能に持續時間の永續
 に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布薬なり
 一、本劑は長時間使用出来るやうに工夫してありますから持續時間は任意にし
 て支差へありません

粉末キホス

品妹姉スホキ工

C-PE19





刊夕のれくお日

作 郎 四 田 澤

新聞を見ぬ日うれしく旅に寝る

これは数年まへ宮尾しげを畫伯が麻生さんと茅屋を訪ねて来て下さつた折、無理押しに五倍子帳に書いて戴いた句である。あわたましい寸刻のゆとりもない身が旅に出て日頃のすべての生活から解放されて新聞さへも見ないで、ひとりの時間をたのしむといふ意味の句だと私は解釋してゐるが、麻生さんの「だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと」といふ句と共に私の日頃から好きな句の一つである。

新聞は文化人にとつては全くひきはなす事の出来ぬつながりがあるが、日頃の生活では所謂「慣れ」の現象から、この事を意識せぬ場合が多い

私達の様に、かうした北邊の隙地にあつて雪に明け雪に暮れる生活をしてみると、いろいろと日頃無關心だつたこんな問題など、反省させられる事が多い。こちらで讀んでゐる新聞も滿洲發行のものでも三日あまり、内地の新聞では五日もおくれてゐる。冬など雪などで列車が遅延すれば、それ以上におくれてくるわけである。尤もラジオの設備のある範圍では、歴史的な日米戦争なども、その日にその感激を味ふ事も出来たが、交通不便な曠野に警備する隊では四五日もおくれてこの感激を味ふた者もあつた。今では新聞といふものは四五日もおくれられて讀むのはあたりまへの如く考へてゐるから、ある任務

を帯びて〇〇などへ出かけて行く場合、日本などところがつて三日も四日もごんごんと汽車に乗つて出かけてゆくのであるから、途中の大きな驛で求める新聞の日附が、第一日は四日おくれ、第二日は三日おくれ、第三日は二日おくれといつた様に、新京へ行つて漸くその日づけの新聞が見られて、うれしいといふよりもびつくりした様な驚きを覚えさされた事などもある。

同僚が「おい、これを見ろ今日の新聞だぜ」と興奮した手つきで新聞を突き出すと、皆がどれ／＼とにじりよつて「ホー、／＼」と内容を讀まず、たゞ各自の手で新聞の膚ざわりをたのしんでゐる光景などもよく見かけたものである。

陣中では新聞は誠にうれしいものである。大勢の兵隊さんが一枚の新聞をひつばり合ひで讀んでゐる。なんぢやときくと、大したニュースですぞと、そのうちの一人が大きな聲で新聞を讀みあげて、しきりに大事件を説明してゐる何だか聞いた様な事だと思つて日附をよく見ると、何んと二年も昔の新聞である。何か物でも包んであつたものらしいが、この聲をきくと、今まで得意になつてゐた解説者が

「おい、これを見ろ今日の新聞だぜ」と興奮した手つきで新聞を突き出すと、皆がどれ／＼とにじりよつて「ホー、／＼」と内容を讀まず、たゞ各自の手で新聞の膚ざわりをたのしんでゐる光景などもよく見かけたものである。

「夕刊」／＼と客を呼んでゐるわけでもなく、たゞ黙々としてまるで顧客が勝手に自らの誤ちをおかす様にしむけてゐるこの人を喰つた不敵の男がまるで世の中を嘲ける哲人の様にさへ思へてくるが、又場所をかへて私の様なほんやりした人間を待ちうける事を思ふと、ひとりでに微笑さされた事を、今ふと思ひ出されて来た。

…ず應にめ需は院入御…

醫學博士 谷 内 與 一 郎

谷 内 小 兒 科 病 院

大阪市港區市國元町一丁目(電車道)

電話 西 八四八(一)番
八〇三七(番)



近作 柳樽



路 郎 選

世の中に未練は無いと河豚も喰ひ
 大阪詩朗
 お隣で自轉車を借る 日曜日
 同
 戀文もタイプで打てば情がなく
 同
 お喋りが過ぎた誠首とは露知らず
 同
 塵箱。コールタールを子がさわり
 同
 通帳で昔は物が買へました
 朝鮮 東狂子
 裏通りどなた様かの 屏書き
 同
 グレッシュヤム。言つた通りになり
 同
 算盤を弾く心を嫌がられ
 同
 眼科醫に 皆貧相な顔で待ち
 和歌山 宏方
 福井市にて
 旅に來て點數のいるものも買ひ
 同
 もう愚痴なことを乳飲も子に聞かせ
 同
 十三時 時計片意地 一つ鳴り
 同
 奥さんの氣障を女中にまでうつり
 西宮 寒草
 芝居道いつを舞臺で死ぬつもり
 同
 昇給も 望まず 素封家の 養子
 同
 習字して知る 平假名の 美しさ
 同
 武士と言ふ流れをうけて兄も征く
 大阪 ひさみ
 冷淡な男 眼鏡の 玉を拭き
 同
 偉大なる阿呆が屋敷またふやし
 同
 二十四時制母も子供も指を折り
 同

ぢか「出た電話社長もどなられる 東京 唳唳
 戦死では無く生きてゐる母は泣。
 仲人は お國の爲だ とおすゝめ
 同
 歸還して瀬戸内海の小さいこと
 同
 一尺の巾すり抜ける 都會すれ
 大阪 勢三
 勝つ歴史 早や切抜を 埋め盡し
 同
 統合の 會社 ゴム印 長く押し
 同
 バリカンの 手際も慣れて星二つ
 同
 髯までが 結氷らしく 長くのび
 朝鮮 惡源太
 ポーナスを出す身に暮の風強し
 同
 四捨五入位で 赤字消えはせず
 同
 嫁の荷をタドンを造る手でも見る
 大阪 葉光
 米英を切る 薙刀の 氣が揃ひ
 同
 次々に 征くを見送る 母強し
 同
 女事務 僕の近くへ 嫁いで來
 大阪 牛歩
 重役は 明治時代の 選手とか
 同
 從弟 歸還
 歸還して 切符の使ひ方を聞き
 同
 三等車 藥瓶一つ 忘れてる
 奈良縣 カズエ
 中傳を貰ひさつさと 嫁にゆき
 同
 チンドン屋 フォームの風を吹かせる
 同
 待つあるを 待む姿も 砂袋
 大牟田 十四之
 女一人 住めば 團はれ者のやう
 同
 復縁を 拒めば 事件 起りさう
 同
 オツサンと言はれ マレー語講習會
 大阪 掬夫
 かるたにも 血汐燃え立つ愛國譜
 同
 更生部 ツマリ色揚げ 染直し
 同
 帯きつくしめて 女の 旅仕度
 大阪 夏子
 手造りの 足袋も 女の趣味のもの
 同
 袖丈二尺 御所車を まつぶたつ
 同
 國の爲め 死ねる男の子を育て
 大阪 くみ子
 寒風の なかをポストへ 走る用
 同
 久し振り逢へば 喫茶とるると云ふ
 同
 落下傘 子供の夢が 一つ増え
 愛媛縣 曉明
 叱るまい 戦ごつこの 服の土
 同
 一時は 首相も 孫を抱き 給ひ
 同
 轉任に 勤務場所は ベンで書き
 池田 雀草
 告別式 以外に 用のない 名刺
 同
 俄か 雨少し 早いが 散髪し
 同
 關州温泉 ライオンホテルにて
 同
 懐と 相談すめば 脱いで 飲み
 朝鮮 幸士
 松葉落つ 心中の型 思ひ見る
 同
 辭めるこつきと うなづく 倦怠期
 同
 牛のデキが 出てきたとこで 夢醒め
 大阪 鐘生
 四國出張(二句)
 お遍路と 大阪辯で 話し合ひ
 同
 名物は 看板だけの 旅に飽き
 同
 植木屋も 空いた所へ 茶を作り
 大阪 彌生
 獨身の 散髪だけは 行き届き
 同
 足足 足暖簾の中は 握り壽司
 同
 見返れば 見返へしてゐる 帯と帯
 愛媛縣 棟友
 種明し しますを 忘れ 賣盡し
 同
 薬屋根に 住んで 保有的な 米を 搗き
 同
 ラデオは 今日 平和な プログラム
 朝鮮 柳慶
 前ぼたんは 捕虜の手を 上げる
 同
 又僕を 素通りをして 友が 征き
 同
 忠靈塔 母子二人に 暮れ残り
 瀨洲 泥柳
 どの様に 生れた人か 聞絶えず
 同
 閨值段 老婆たまけた 御念佛
 同
 こせつかぬとこを 原住民に見せ
 京都 ぶじ彌
 胸巾の 狭さ 淋しき 二十一
 同
 醫者へ 行く柄を 撰つてる 娘が 一人
 同
 十八時 まだ紙芝居 やつてゐる
 大阪 松南



巡禮の子に氣の毒な雨となり 大阪 伊三郎

内職の手に 献金の感謝状 同

田舎の子葬具も書いて遊ぶなり 大阪 正太郎

濟むまへんとすと坐席へ汽車の旅 同

漫才館むしろおのれを笑ふべく 大阪 將吾

かはらけを投げる旅愁が風に乗る 同

南方の書物へ一家揃つてゐる 京都 祇堂

女事務。そつと自分の齡かぞへ 同

御聖徳の秋晴れたへハイキング 京都 黙魚

擴聲機 少し離して話し出し 同

青空の廣き戰場へ續いてゐる 東京 青衿子

捷報に負けてはならず素足なり 同

一冊で我慢の出来る 日記貰ひ 兵庫縣 葛藤

下駄と棒放りつばなしで子供居す 同

電話聴きつゝ鉛筆で顔を書き 大阪府 喜堂

残る柿又叩かれて 秋寂し 同

下役は一輪もなき菊人形 大阪 佳春

サンバラの髪を思はず菊もあり 同

齡の差はいはすおなじ趣味でも 大阪 三丸

人違ひ 脱いだ帽子の形なほし 大阪 腦薄留

久々に逢へばどつちも年をとり 鳥取縣 順子

配給でこと足る暮しうらやまれ 大阪 加代子

歌劇出て子ブランコを誘はれる 兵庫縣 美代子

萬歳が千人針を割つてゆく 大阪 千代

火叩きも強い國をば知つてゐる 大阪 松風

子の應召父はきつぱり酒もやめ 大阪 秀溪

認識は 充分ある筈 骨惜しみ 大阪 無哲坊

歸還して 親しいものに家と土 鳥取縣 弘樓

増産へ 今日も雜草の露を踏む 大阪 六龍子

みちたりた 想ひに夕陽美しい 廣島縣 一滴

ジャングルに 交叉點あり小休止 ボルネオ 風來子

孝行な 爲替と知つた三等局 大牟田 初舟

牡丹雪 降るだけ降れと立哨す 瀨州 錦風

人生もかうだよ 枯葉落ちてくる 津山 燦太郎

洛東江 お客一人の渡舟 朝鮮 泉泡

おでんや 鏡馬鹿が飲んでゐる 大牟田 逸桂

恥しいと云ふ 桃われも見せたい氣 大阪 照二

名前もう 決つて腹の子は元氣 大阪 蜜彦

戦果聴く 癒えねばならぬ人ばかり 大阪府 哲文

造船工 對アメリカの鉄を打つ 大阪府 輝生

姑娘も サイトサイトと讀み習ひ 大阪府 天童

宿題を書くよに 吾が子の見舞狀 大阪府 魔沙王

古時計 質屋通ひを 覚えさせ 大阪府 丹誠

病む身とせめて 遙拜おこたらず 大阪府 白星

臣道實踐と書いた團扇で火を起し 大阪府 八郎

概念の やれ 理念のと懐手 大阪府 妙德

土産物子へ 結び目がかたすぎる 大阪府 影法師

メイドイン・ジャパンのもてる時となり 大阪府 繁

青い空 忠靈塔は語らざる 大阪府 すゞき

肉を斬らせて 骨を斬り 大阪府 潤

スリツパの色も 綺麗な新患者 大阪府 健太郎

月白く 肺病院を 照らしたり 大阪府 三惠

飛行機は 賣物自國まもり得ず 大阪府 潤三

安靜の身になぐさめのとんび舞ひ 大阪府 朝子

安つばい 印で千圓預けて來 兵庫縣 鷹丸

汽車動き 早口になる窓の外 池田 良

散髪屋 病人らしい子供供ゐる 尼崎 草水

合併の噂へ 名刺刷りもせず 大阪府 仙人

貯金帳 一家の名前みんなあり 兵庫縣 甲東

散髪屋 出て來た男空を見る 大阪 遞

母在りと 憶ふ 若鷺一つ舞ひ 兵庫縣 笑月

よい手紙 月の光で 讀むとせう 神戸 若蘭

建艦へ 沸る銃後の 献金よ 大阪 樂々

大戦果 初日とともに 何處までも 大阪 庄内

必勝を めがさずズボンの 繼の繼 大阪 いづみ

我が子等 よいびき安かれ 征く日迄 鳥根縣 さわだ

名月へ 影連れて來て 連れて去に 松山 耕一路

先輩も たタイムレコードも 身分 大阪 紀川

故郷の 良き窓 田が伸び山が伸び 阪 早周

忘れても 良き事のみが目に 映じ 高知縣 神樂

茶道具も 揃へ 獨身寮に 老け 瀨州 しけを

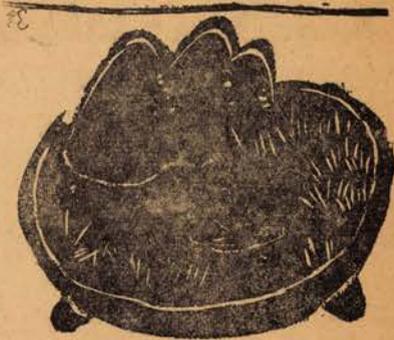
足どりも 話も 風も 師走めき 尼崎 治

京都 岩川

徳島縣 太朗

奈良 晶平

京都 岩川



草木徒然

西 田 艸 樂

正月に使ふ草木は、三十種に餘る。

此の數多い草木に一々詠れがあり、それを一々書いてたのでは、貴重紙面を徒らに占領するので、就中、正月らしいところを少々申上げて草木個々の隨筆は後日にゆる／＼と御意得やうと思ふ。

門松と櫛

門松にすぎる禮者はきほん過ぎ 古句
お酒もなるべく増産戦士や前線勇士に振向けたい此の頃この句の様な御機嫌風景は、お正月でも差控へやう。

うらびる

注連繩に飾りつけたり、鏡餅の下敷にしたり、正月用に使はれる外あまり用のない草である。もつとも、莖軸で籠などを編むが……。葉が相對してゐるから諸向といひ、山に生ずるから山の草と呼び、葉の裏が白いから裏白と書く南地に産するものは葉の長さ三四尺もあるが、正月用には小さいのが喜ばれる。懸花植物だから胞子をつけるが花は咲かない。草であるが年々枯れることなく、新芽を出しては古い葉の上に一段の新葉を張る。これが彌榮のこゝろから芽出たがる一つ。諸向といふ如く葉の對生が夫婦相生を祝ふこゝろ、裏の白いのが潔白を現はす、又齒菜ともいふ、齒は齡、菜は枝、字義から来て、年齢長久、子孫繁榮に祝はれる。

ゆづりは

櫛、交讓木、ゆづりは等と

迎春と草木

前にものした原稿を後廻しにして、新春にふさはしい草木の事を書けとの御命、なるほどそれも一興、しかし、人間の生活に種々な行事が行はれるが、正月といふ行事程、年中行事のうちで大層なものはないと同時に、此の行事に用ひられる草木の類も亦甚だ多種にわたる。一々克明に書き記して行くと、なか／＼と大なものになる。まづ、年といふ時間の大單位、この言葉からして、草木に關係がある即ち、トシは疾しだといふ、春夏秋冬の巡ぐる事の早さをいふと解するものもあるが、本居翁の説、田寄の約つたものであるとの説が正しい様で一神の御靈以て田に成して天皇に密奉賜ふゆゑにい

へり一がそれである。我國は瑞穂の國で、稻を一年に一度收める。此の期間を一と田寄ひとせとなるもので、吾々が又新しい年を迎ふことゝとりも直さず新しい稻のひと收獲を迎ふこととなる譯である。

そのつもりで新春を迎ふことは、食糧増産がやかましい大東亞戰爭遂行の一環がなくと、吾等日本人の心懸としていゝのである。

さて、此の新しい年を迎ふる爲に、吾人の家々でどの様なこととするであらう。

門に門松を立てる。これに竹梅、處によつては櫛を添へる。注連を張る稻藁を纏つて造られ、山の草、交讓木、橙をつける。家内には、玄關に松竹梅の鉢植か、生花が置か

れる鉢植に福壽草がなくてかなはぬ。歳徳神を祭る。三方が飾られる。三方の上には何々が載つてゐる。米が盛りれて、橙が頂きにのつかる。これにほたはら、昆布、申柿、榎の實、搗栗は大福の茶の取肴とする。餅を食ふ。その雑煮には何が要る。里芋、大根菜の類。屠蘇が酌まれる。これには何が配されてゐる。大黃、白朮、桔梗、桂心、烏頭菘藟。松の内六日を過ぐると七日の朝は七種粥、今は形式に流れ正直に入れはせぬが春の七種は、せり、なづな、ごぎやう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろの七色十五日ともなれば小豆粥、その外正月の御馳走には、酢牛蒡、黒煮豆、蒟蒻、胡蘿蔔、蜜柑等々、かゝり數へて來ると

松は申すまでもなく四季色を變へず、千年の齡を保ちて萬木に勝れていと目出度く、門松に撰まれる譯は先刻御承知のはずではあるが、門松の起原を考へると、松はむしろ櫛の後に來つた風習らしい。神代、かの天の岩戸隠れの御時、神々集ひたまひ、天の香久山の五百津眞櫛を根こじにこじて、鳥居に擬らへしに始まる。由來門は天子の居ませる家の外民の家には拵へぬ習はしであつたが、今は下々の者まで門構への家に住んで得々としてゐる。昔は、正月には家に神を祭り、我家を神の御社とするところより門を作り櫛を門の形に立てた。それが松に變り、竹、梅などを添へる風習となり、門松と稱し今より八百四五十年以前、堀川天皇の御宇は既に民間に行はれたといふから、古い風習

書く。

「標のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う情けなるに、思ひかけず似るべくもあらず、葉の赤うきらきらしう見えたるこそ、隠しけれと、をかしけれ」
清少納言

これで大體感じが出てゐる常盤木であるが、初夏の頃新葉生じて、舊葉謝落する。それでゆづる葉と稱し、親子代々相譲つて家系連綿をあやからうといふ譯である。

これぞこの春を迎ふるしるしとして
ゆづるはかざし踊る山人
現存六帖・知家
いつとなく勳を君にゆづるはの
なほとこわかにかさかゆへらなり
松葉集

臭橙、回青橙などに作りてだいたいと呼ぶ柑橘の類でいづれ南邦渡來植物であらう。とても苦くて食ふに堪へないが、その苦さが役に立つて未熟橙實は苦味丁麩の原料である。それがなせ正月物の仲間入りをするかといふと、此の果實は、冬には黄熟するが、春巡り來たると又青色が戻つて年々落ちない。回青橙と書く以所もこゝにあり、代々落ちずに大きくなるから、我家の代々盛大を願ふ心が通はされる。

橙は年神さまの痴氣所

古句

福引の金玉を飲む痴氣持

古句

ちと下びるが、橙を痴氣藥に用ひたので、こんな句がある。前の句は歳徳神様の金玉のあたりに橙が飾られるといふたあいもない句である。

ほんだわら (穂俵)
正月の蓬萊節に穂俵といふものを作る。海藻ほんだわらを乾燥して、薬で東ねて米俵

お買物は三越

定休日、毎月曜日
営業時間 9時—5時半

大 阪 三 越
高 橋 橋 本



の形になし、稻穂を俵にするに寄せて祝意を表するのであるが、このほんだわらに就ては、他で語る機会もあまりなからうから、少し長くなるがお許しを願つて、日本書紀にある傳説を紹介する。

ほんだわらといふ海藻各海岸地方に産する褐藻類で馬尾藻の字を充る。海中稻々深い

處に生じ、全體は柔く、褐色を帯び、葉は細長柳の葉を小さくした恰好、にぎやかに枝が出て、各枝のつけ根あたりに米粒のやうなものが澤山くついでゐる、藻に生ずる實だと思つてゐる人があるが實は、空氣袋で、水中の植物に多く見る如く、海底に沈んでしまはぬ浮袋の役目をする。實が恰も米粒のやうだから穂俵といふなどと書いた本があるが、實はないのである。

和漢三才圖會には、「冬取乾之以藥粹一握許折卷束之」
豫作「米俵形」名「穂俵」
爲「正月蓬萊盤飾」とある。

この海藻をなのりともいふ。その謂れば允恭天皇、皇后大中姫の御妹衣通姫を愛したまひたれど、皇后の妬み甚だしかりければ、河内國茅渟宮にかくまひ、日根野の遊獵にことよせ、屢々そこに通はせ給ふた。或時の行幸に衣通姫の奉つた歌に

等願羅階爾 樹羅母阿閉那毛
舍羅等利 宇羅乃波摩毛能 余留
等祝時爾

と、帝これによりて宣りたまはく、此の歌他人に聞かしむべからず、皇后聞かば必ず恨まむとぞ。それ以來人々其藻を勿告藻、——なのりを藻と云ふに至つたとある。
日本書紀に出づる傳説である。

簡易生活に關して (その三)

制服之家

東京 福田 山雨樓

小生在飯賢時は鐵道の制服一點張りだつた。東京へ來てから背廣にしたが大阪で作つたものを令たに着てゐる。拵へてから二十年近くなるものもある。住宅も同様手狭で辛極してゐる。新築の家に入つて既に二十二年過ぎた。大阪でも新築に入つたれで不精なのであるが、高田保馬博士の民族耐乏の實踐者だ。

僕の生活

大阪 河野 夜王

あれ買へばこれも是非要る
諦める
誰の句だつたかこの句を知つたは十何年の前ですが小さい時から赤貧に慣れ切つてゐる僕は昔からこれを實踐してゐます。

映畫の題

野元 吐空

「たつた今笑つて散つた友もある」
國民決意の標語に行は通り南に北に國を擧げての戦争がある通り居ります。吾々銃後の一人々々は言ふまでも無くすべて戦争への覚悟で簡易生活を送り日々の職域に進進せねばなりません。

然も皇國の有難さは此の切りつめ

た我々の生活の中に色々な慰安機關が平時と異なる事なく設備されて居ります。道頓堀に新世界に夜の街の明るさこそありませんが一步堀内に入ると電燈は煌々と點り觀客の何所にたつた今笑つて散つた友もあると言ふその時間的な切迫感が見い出されませう。

「有難い國の街頭に職場に拾つた映畫の題が腫し出す一朗景を御紹介致しますませう。」

その一 街頭にて

頂度木枯の吹く夕刻でした。もうオーバの襟を立てた人やジョールで頸を覆つた人の多い日でした。その人波について歩いてみますとすぐ前の二人の青年が話し出すのが聞えます。

「なあ女の手を見ようか」

「何所で」

「〇〇の方が空いてゐて女の手が良く見えるぜ」

「それより英國崩るゝの日を見ようか」

「英國崩るゝの日か」

「どつちでも良いけれど」

どつちでも良いはありません、女の手より英國崩るゝの日こそ吾々の目的ではないでせうか。

その二 職場にて

「もし〇〇さんですか」

「ハイそうでございます」

「甚だ申兼ねますが今〇〇劇場で



隨筆 波丹の餅を語る

小山文三

かなければならないのである。若し下手に小搗きすると蒸した糯米が杵に喰つ付いて思ふ様に米が延びないのみならず、やたらに力を入れ過ぎては敷藁の上へこぼれるし、十分に延びないで搗きムラが出来るなど、其小搗きの上手下手は餅の仕上りと其味に影響する處が大きいから此小搗きこそ餅搗き男の腕の見せ處と言つてよいのである。

○ 小搗きが終ると、慣れたあしらい人が、湯加減のよいあしらい水を適宜にくれて搗き人の杵とあしらい人の手掌とピッタリ呼吸を合せてベツタシコ、ベツタシコと本搗きに移るのである。此呼吸の合つたトツテントンの杵の音とベツタ、ベツタのあしらふ手音とは垣根の外や堀越しに聞いて一入風情の深いものである。

丹波の子供は一飯を喰ふ茶碗の音と餅搗きの杵の音で眼を醒ます」と云ふ諺があるのも自ら首肯されるのである。

○ 此小搗きは只杵でコツク／＼と搗くだけの事で、一見して頗る簡単な操作であるが、これの力の入れ方が平均してゐなければならぬし、蒸シの冷へ切らない内に萬遍なく搗

る餅を引つ張つたり、裏返したり、曳き重ねた餅の上を軽く叩いたり、適度にあしらい水をくれたりして、其杵の落つ可き處を指示するのであるから敏速な手振りと動作が要るし、杵の上下に動く瞬間に搗けた處とまだ搗けない處の見分けをつけて搗き男の杵の向ふ處を定めてやらなければならぬのだから最熟練と経験を要するのである。だから搗き人とあしらい人との完全なコンビが絶対的必要條件となる事恰も漫才に於ける五郎と雪江、才藏と新助に似たものがある。

○ 筆者の若かりし頃祖母のあしらいで餅を搗いた事がある抑々初めて杵を採つたのであるから、祖母のあしらふ其手を搗きそうで危くて危くて搗かれなかつたが、之れを見兼ねて母親が之に代つて呉れたので漸く一ト臼、二ト臼を搗き上げ得られた事がある。さすがに母親は若干の若さの爲めか、あしらふ其手を敏速に引き込めて呉れたせいであつたろう。

○ 古い話だが我丹波の生家で嘗て祖母の還暦の祝があつて其地方の當時の慣例に従て二

何を演つてみますでせうか」
「あなたは狙はれてゐる」
「え、何んですか」
「あなたは」「あのもし／＼」
「あのね、あなたはね」
「僕ですか」
「いえ違ひます、あなたは狙はれて」
「僕がですか」
「僕がですか」
ふのは「わてまだ男の人にあなたなんて言ふたの今日始めてやし、それに二回も三回も……」

勝利への生活

大阪 八竹 正柳

「簡易生活をした事があるかといふても一寸早急にピンと來ませんか」と云つてた男があつた。

時局を辨へぬも甚しい奴だと怒鳴られそうである。

戦争と生活の簡易化とが密接不離の關係にある事は言を俟たない。何時の時代に於ても何處の國に於ても戦時は平時と異り、凡ゆる物資の不足を來す事は周知の通りである。

然るに、我國は事變以來五星霜、一部物資の確保が困難になつたとは云ひながら、幸ひにして猶未だ甚しい不足を感じないのは實に有難い國狀である。だから、斯んな男中ではあつたのも無理は無かつたのである。そして又一面、我々が順次、簡易生活體制に順應して居る諸左でもある。

を聞いた。彼か或る住民に
「君達は何故衣服を纏はないのか」と訊いた。住民は
「貴族達は何故衣服を纏ふのか」と訊き返し、——自分等は神に授けられた清淨無垢の身體を持つて居る何一つ穢の無い神の子が何故衣服を纏ふ必要があるであらうか。——と云ふ意味の事を申立て、居たぞうである。

× × × × ×

氣候、風土、文明、文化の變化、並に差異等が自ら民族の衣、食、住を支配したのであらう、が、今や、地球がひつくり返へりそんな世界の一大轉換期に、何が何でも捷ち抜き、生き抜かわば止まない我々とは、南方民族の斯う云つた眞念も亦我々の生活體制簡易化と照し、味ふべき事ではないであらうか。

同義語

大阪 戸田 孤篋

生來ののんき坊主で金の有難味なんかいくらおやぢに言はれてもわからぬ私でなかつた。天の配材が妙薬みだいた友達が一人現れた。今から二十年前の話。その頃の××氏は學生で下宿住居をしてゐたからあたり前のこと、いひながら机と卓との區別を知らない。二三年たつてお嬢さんをもらふと病愈々膏肓に入り、炭取りと蠶十能と應取。火鉢と熨斗と炬燵と全く同義語と信し、然して口には數寄屋と茶室と美學を論じてゐた。手を合して拜む神も佛も持つて居らず、「勿體ない」と云ふ言葉の意味も御存知ないが、合理化を知り、骨の髄まで消費經濟に徹した經

升取りの大鏡餅一重ネづゝを親類縁者に配つた事がある。恰も一臼を以て一つの鏡餅を作るのであつたし、配る可き縁者も廣かつたので、大勢の手傳ひを求めて二日間に渉る餅搗きをやつたのであつた。

當時親類の伯父さんに餅のあしらいの名人があつて、此伯父さんがあしらふと誰が搗いても杵が軽く上るし、而も早く搗き上るのであつた。そして少し惰けた搗き方をするといふ伯父さんはソツと餅を手に取つてしまつて搗き男に空ッぽの立臼を搗かせたりして大笑ひの裡に搗き人に活を入れるのであつた。これを伯父さんは曲あしらいと言つて自慢してゐるのであつた。

餅のよく搗けて居るか、ゐないかは搗き人の上手下手にも因るが、専らあしらい人の水加減とあしらい加減の見識如何に懸つてゐる事は申す迄もない。大神樂よりも道化、シテよりもワキ師の技能を要するのと好一對であらう。

搗き上つた餅はトリ粉の入つた半ほうに移されて鏡餅や小餅に作られる。トリ粉と言ふのは粳米の精白したのを能く洗つて暖臼で碾いた米の粉である。そして半ほうと云ふ

のは關西地方の嫁入りに持つて行く大きな木製の盥の様なもので一名半切りとも言ひ普通の盥よりはやゝ淺く作つたものである。

搗き上つた餅を半ほうの中で小餅や鏡餅や熨斗餅なぞ様々の形に作るのを丹波では餅を探ると云ふ。此採り方に又技能を要するが大體左の手の親指と人さし指で徐々に堅く締め剪つて右の手で引きちぎ

統戦
後線
も線

版寫膽田阪

—北島福上區花此市阪大—

會商田阪 株式會社

小餅の形に採るのである。若し夫れが下手な採り人であつたならば一臼から採る小餅の数が狂つて来るのみならず餅の形に大小が出来て揃はない。況んやトリ粉を餅の内側にまで混ぜ込んだりすると餅に割れ目が出来てしまつて不格好な餅が出来上るのである。又トリ粉をつけて餅の表面を軽く撫せ廻すにしても其

度數の過不足によつて光澤と味覺に影響するのである。筆者の祖母は餅採りが好きであつて老齡八十を過ぎてても尙擲掛けの雄姿で餅採りをやつてゐたのを記憶する。

餅搗きに關聯して今でも唾液の出て来る様な思ひのするのには手ノクボ餅の味である。由來手ノクボ(手ノ窪)と言ふのは茶碗や箸などの食器類を使はないで掌に載せて食ふ事である。例へばちらし壽司を拵へた時など其少々を杓文子から、じかに掌の窪みへ移して貰つて試食するの、も手のくほである。これと同じ様に正月の餅搗きなど、小半日も掛つて搗くのであるから其あい間の一ト休みに今搗き上つた許りのホコ／＼の羽二重の様な餅に小豆餡のたつぶり付いたのを手の平に受けて其一つ二つの立喰ひを試みる等此手のくほ餅の味は搗き男にとつては蓋し最上の味覺であらう。

丹波の主婦達は恰度此の搗き男の腹の空く頃を見計つて手のくほ専用の一ト臼を搗かせてから、先づ一ト休みを宣言するだけの用意と心遣ひに馴れ切つて居るのである。

濟學士さまだつた。もう四、五年も逢はない。おそらく彼だけに御時世も顔負けしてゐることだらうとはゝえまれる。
小生近年合オバーの御厄介にならなくなつた。學生時代みたいに夏服と冬服だけが澤山だと思ふ様になつた。この妙業も私にはこの位の効きめしかない。

極樂

大阪 正本水客

着たきり雀で食物も飲物も何も要らぬ連の葉に靜かに坐つてゐれば事が濟む、まことに極樂は簡易生活の最高峰。地氣はまた針の山の血の油の道具立の豊富なもの面白對照だ。

大量生活

松江 尼 綠之助

暗い中から起き初めた子供達は朝の雀だ。親舎と豚舎を一纏にしたやうな賑やかさだ。それから朝の行車出勤、登校といつた一時の中に指搦官の咽喉筋は青く浮き上つてばかりゐる。子供が六人もゐる僕の家ではたゞ大量取扱といふ點にのみ簡易生活を見出してゐる。
こちやくとこちやくとある中に父 綠之助

名札

大阪府 黒川 紫香

來る川舟の船頭生活が愈々懐かしいものになる。
學童のつけてゐる名札、あれを一服の人とせよといふと思ふ。○○さんと違ひまつかと尋ねる必要もなし誰だつたかなアと考へる必要もない。亦是があるとうかつた事も出来ない。

芳香は！

健康意圖を増長す

伊豆椿

純植物性

伊豆椿香油本舗 大 錦 影 芳 園



川柳 史界世 (XX) 戸田孤篷

(二八) 科學拾遺 (1)

概観

科學する心、柳心に通ひ、
研學刺戟の一助の念しつゝ。
科學の自家は隣の支那だが
地理的環境は寧ろ後進たる歐
羅巴に其行跡をゆする。地中
海こそはエジプトからギリシ
ヤへ、ギリシヤからアレキサ
ンドリヤへ、華かな場面轉開
の機會をあたへる。
パピルスは手垢のついたま
ま、讀まれ
ターレス

水は萬物の原質であると云
ふターレス、西歐科學の鼻祖
は數學、物理學、天文學に精
しい。
萬物系圖一番上に水とかき

幾何をかじつた人ならば誰
でも知つてゐるピタゴラス、
本格的な數學をこしらへ上げ
エジプト旅行もした記録があ
る。

ピタゴラス

エジプト土産圖と四角と三
角と

デモクリトス

電子、原子、分子の根本思
想の元子論、ギリシヤのデル
ファイではオリンピッククが行は
れてゐた。

オリンピック元子がはねて走
り出す

アリストテレス

川柳世界史(III)に既出。
科學の父といはれただけであつ
て、萬能、千手觀音式の學者

まとめることの天才、自然科
學のほかその手は精神科學や
學問研究の分野にまで及んで
ゐる。

一生は星の數程徹夜もし

先生は偉し眞理は尚偉し

アルキメデイス

排水量何萬噸といへば軍艦
の重さである。浮き沈みする
物體の排除する水の分量の重
さを測定して、そのものの重
さを知る法、これがアルキメ
デイスの原理で、風呂の中で
思ひついたのは有名すぎる話
挺子の理も發見してゐる。
湯加減もいはずお詫もぬれ
たま、

暗黒時代

ギリシヤ文明がアレキサン
ドリヤへ、アレキサンドリヤ
亡びて亦立たず、文化の命脈
はアラビヤ人の手に移る。理
屈の爲めの理屈がはやつたり
不老不死の靈劑を求めて、萬
物還金の錬金術が起り、化學
興隆の基を開く。

人間の慾にフラスコちとあ
きれ

グーテンベルグ

木版の元祖は支那であり日

本である。木版の不便を除き
潤達自在の金屬活字を發明し
たグーテンベルグ。聖書の印
刷には寫經僧の猛烈な反對に
逢ふ。

うれしさは妻の名前を刷り
ちらし

ダウインチ

ダウインチも既出の一人。

輝しい

戦捷の

春の

お姿を

工藤清寫眞館

大阪西區土佐堀船町
電話土佐堀五五〇番

去年はダウインチの記念祭が
あつた。科學新日本建設を日
本ルネッサンスにたとへたが
る。畫家としてより科學者ダ
ウインチの名が我國人の中に
も親まれる様になつた。

ダウインチのそれらしくな
い設計圖

コベルニクス
動いてゐるはずの太陽を靜
止させ、靜止してゐるはずの
地球が動いてゐると云ふんだ
から大騒動、百年たつて共鳴
者ケプレルがようやく現はれ
たと云ふんだから察しはつく
る
倒立のまゝ、てお前も僕もね

ガレリイ

堅い堅い物理の教科書に美
術の遺跡ピサの斜塔が残るの
は之が物體落下の法則の實驗
に利用されたからである。振
子の等時性を發見し、望遠鏡
を作る。地動説を固執して死
ぬ迄監視付きの生活をおく
る。

ランタンゆれるミサのある
ことなど忘れ
物體落下ピサの斜塔は默念
と

ケプレル

學問は貧富によらない、學
僕としての苦學の生活、コベ
ルニクスの地動説を確信し、
楕圓により天體運動を快明す
る。一生放浪して給料不拂に
逢ひ通し。

プロフェサー掃除の小言な
ど云はず
傳給に貸があつたといつて
死に



詠 近 舟 同

松山前田五健

利廻りを細かく説いて面憎し
十二月八日中正眼のまゝ
検印が同姓である軍事便
人間に似た顔も居る魚市場
打入りの氣持ち一億十二月

勸業農村新年

正月の火へ休餅の手をかざし
日本語君が代 覺え富士覺え
床屋から出て 顎を引く風の中
神在す如し 注連揺れ刀が 打て

金澤 安川久留美

常會は五燭の下で 藁も打つ
譬へんか 蔣介石ぞ冬の 蠅
これも縁代診と 呑む乳くばり
量目よ大根の土がくへるか

兵庫縣 御影町 長崎 柳秀

コスモスの身の 振方は風まかせ
露天風呂兵の 度胸は唄になり

病歴を語る疊の汚れやう
寝てる間が極楽ですと母弱し
銅壺よい音晚酌斜なり
顔のさす時のマスクと知つてるか
「だつて」とか吐き金を取置き

神戸潮田明坊

造船所吊り下げられる役があり
家傳藥此處ら今だに草深し

今治 長野文庫

職に就き漸く光る敦養美
三人になつて話が俗になり
火叩きの朽ちるも勝つて居れば
風説に大根送る親の愛
やればやれますと微用から便り

奈良縣 龍田町 嶋田翠峯

運針がやうく出来て母がなし
ほめられて肩たゝかれて甲種なり

長野縣 須坂町 高峰柳兒

身元洗われて縁談そのまんま
メモへ書止めて陳情柔ける
見送りへやつと首出た満員車

福井縣 村田眉丈

畫廊ではまだ千圓の繪が賣れる
パパママの頃米英の儘になり
同窓の閣下にすこし氣が引ける
不眠症夜光時計もうつむけて
奥まつた部屋のラジオは相場らし
悪筆のどれも斜にへつた墨

急性・慢性 化膿症

本剤は品質至純なる二基ズルフォ
ンアミド劑にして、内服により化

膿症の病原菌克服作用を發揮す。

故に、患者の苦痛を速に化膿・疼

痛・發熱等の症状消退迅速にして

短期間に根元的治癒を促進せしむ

淋疾・婦人科化膿症

外傷化膿・丹毒・面疔

齒槽膿瘍・眼瞼炎

中耳炎・扁桃腺炎

包裝二〇錠五〇錠一〇〇錠 全國藥店に有

製造元
山之内製藥株式會社
東京・大阪

錠ルジバルア

OP-17

ろ邊ぜい語

金澤 久留美

昭和十八年は羊の干支である。羊といへば平和のシンボルのやうに柔らかな動物―牧場をおもひ、草笛を聯想し、更に夢の國も思ふ。「暴逆極る人間の血」を見ない平和も今では昔の夢となつてしまつた。天使も鳩も過去の繪巻物である。その繪の中から赤い血を見る時代もあるにはあつた。

初陣に斬られて歸る華やかさ
 之は芝居の「尼ヶ崎」を詠んだのであるが東條子といふ生半毛の川柳人が當時代議士選挙の初陣に落選した。柳太郎氏の華やかさにたとへて批評した。作者こそ迷惑千萬な仕末である。

原作を改作し脚て本を上場することとは作者に對し非禮極る仕事である「ホト、キス」は蘭花の書いたまゝでよい、「金色夜叉」も紅葉の書いたまゝでよい。お芝居や映画に上場する作は、はじめから脚本にてつち上げた紅葉物や春葉物でよし。渾石さんの作品を映畫扱ひする事は作者の獨創を蕪なしにする卑劣行為である。

甘い／＼婦人向の小説や、史實を臺なしに嘘ばかり書いた所謂大衆向小説よりも渾石さんの「草枕」や「三四郎」などを再讀すると所謂干鳥賊をかみしめたやうな味ひがある。醫師や、辯護士ひかとも角、小説家だけは單なる「はやりつ兒」といふやうな短い運命をもた

したくないものだ。故人でも景観花の作が生きてゐる如く、今の自稱大衆作家も自軍して、時代に媚ひた場當りのな作品を多く殘して貰ひたくないものだ。

往年矢野きん坊といふ人の三昧に入つた川柳共鳴を腰かけにして文壇の寵兒となつた人が三人ある筈だ。その中には未だ川柳に理解をもつ人の一人位はあるやうだが、あとは自分の出世が柳壇の土臺であつたことを忘れてゐる向きもある。きん坊氏の命日ぐらひは忘れず、親香の一本ももとしてゐるかどうか、とかく人間は昔の恩人を忘れがちになるものといふ。これも私が悪しの悪い印象をうけた彼に對する八當りと思つて頂きたい。



贈られた詩集に友の名を見付け
 詩集ふとわが境遇を思ふなり
 女から詩集擴けて話しかけ
 詩集サラ／＼少女のウブ毛
 月給を言はず詩集をためてゐる
 詩集また日本の力示して
 決戦へ詩集しつかとうたふあり
 とつぐ身に詩集はるかな灯と想ひ
 詩集讀み一度歸省もして見たく
 何時かもう詩集讀む身がいと
 詩集の言葉々々を女學生
 愛人へ野戰詩集は匂ふなり
 詩集から我が薄倅の過去を見る
 かまきりの首細み詩集と秋の窓
 僕の詩が載つて詩集を明るく見
 兄の詩集いゝ人があるなと思ひ
 みんなみの君が詩集のたくまし
 もう降りる時間と知し詩集なり
 詩集讀む煩あたゝかし女車務
 詩集ふと春の日向を戀ふ身なり
 佛前の詩集インクの香も強く
 詩集いゝ淡きピンクの紙つゞる
 詩集一卷成る闘病の永きなり
 借りてゐた詩集形見となつた朝
 詩集から披と言葉にふれてゆき
 逍遙へとにかく詩集持ち馴れて



一路集

詩集 民郎選

芳露 忠一 潮流 泥柳 松南 青鈴子 同 伊三郎 雲峰 正美 一人 楓葉坊 یشه 周峰 神樂 甫光 朴泉 祥月 初惠 一馬 牛歩 千斗 三丸 朔郎 照弘

甘い詩を肩を並べて讀むこゝろ
 幸あれよ詩集の内のクローバー
 體裁に拾つた詩集を忘れて來
 處女のみ、詩集をくれてゆつた
 さようなら詩集に残る別れかな
 秋の句を詩集さみしい様に書き
 長雨へ詩集をめくる手の疲れ
 希望未だ捨てぬ年なり詩集買ふ
 詩集讀む少女の顔にみとれたり
 兵站に詩集残してさりけなし
 詩集と同じ昏れゆく秋の風と居る
 縁なしの眼鏡見てゐる詩集です
 縮けば詩集から散る秋の花
 詩集など讀んで月夜へ出る
 詩集ありて一入床し遺品展
 英靈の詩集の中に生きてあり
 詩集讀んで母の故郷を思ひ出し
 人格にとらみ合せて詩集讀む
 小休止慰問の詩集出して讀み
 詩集讀み今年の秋も肥えられず
 小春日の檢に詩集の仰むける
 薄倅に生きて詩集を手ばなさず
 詩集讀む祖父眞四角に坐り
 啄木の詩集と戀と疲れてゐる
 詩集もつ夏手袋は消費の手
 一人者詩集を甘い聲で讀み
 わが胸に觸れる詩集へ眼を閉じ
 本棚で詩集すゝける農繁期
 讀み合つた詩集きれいな戀でと
 (秀)詩集とは別き方も古城見ゆ
 (秀)吾想の詩集の餘白と消えに
 (秀)愛情の意識、詩集讀んでるす
 (秀)女詩集から昔の手紙落る
 (秀)詩集から外れ視線が冴き

光子 正朗 定七 葉光 同 丸太棒 林葉子 勢三 カズエ 昌坊 蜜彦 晶平 伊太古 詩朗 詩延 さわだ 彌生 臥牛 覺史 利一 猪三郎 春童 同 小雅子 佳春 英雄 青々子 一滴 正二 默魚 葉光 若菜女 春童 正二

柳界展望

催

▼本社主催の日本師走川柳大會は十二月十四日午後五時半から御津八幡宮で開催詳細次號▼松坂俱樂部麻生路郎川柳講座は六月二十日午後二時▼有恒俱樂部川柳講座は七日午後五時開講▼十九日午後三時伊丹吟行▼阪大川柳會は十八日午後四時▼大阪警察病院川柳會は廿二日午後四時▼尼崎住友産報川柳會は九日午後七時▼大阪逓信病院川柳會は四日午後四時▼川・進下關支部句會は十月



もほ川柳會の人の々

一日市多樓居に於て開く▼川・難尼崎支部句會は十一月二十一日午後六時尼崎昭和荘で開催▼川・難松江支部では十一月廿九日温泉旅館で支部同人會開催▼川・難松江支部では十一月廿一日、岩城旅館で大西八歩氏(不朽洞會員)を圍む會を開かされた▼川・難松江支部では明春一月十七日川柳大會開催の豫定▼伊豫大洲町では十一月廿二日大政翼賛會愛媛縣支部文化聯盟愛媛縣川柳協會兩豫第一支部結成式が行はれた

消息

▼篠山壽彦氏(不朽洞會員)「内地も暑い事と存じます此處中支は又格別でありまして一雨來れば冬物を着たい程の不順な氣候であります。然し其の雨が又曲者で降れば長雨で道の悪い事はお話になりません。暑中は全員揮一本生活ですから内地の兵隊さんとは大いに趣きを異に致します」云々のたよりに接したので編輯部では「兵隊さん寒いでせうと出したのに蚊が出て困ると返事來るなり」と云ふ子とての歌を思ひ出されてゐる▼櫻川不水(不朽洞會員)は船が長崎三菱へ入渠してゐるので唐八景に登り、山陽を偲んで山頂から句を寄せられた「ビール十本天草の灘に消え」▼岩崎柳路氏(不朽洞會員)は張家口日本居留民團議員に高懸で當選された▼福井哲氏(不朽洞會員)は朝日新聞社の「盟主日本一寫真」の應募作品「放牧」が特選の榮を擡はれた▼西川壽美氏(不朽洞會員)は十一月十三日越中から「宇奈月にただ洋館のなかりせば」といふ句を寄せられた▼高峰柳兒氏(長野縣)は十一月未社用で新潟縣へ出張、田口妙高ホテルから「雪の視野落つく炬燵になりけり」の句を寄せられた▼安井ひろし氏(徐州)は徐州文化協會工會議所書記長を辭し徐州文化協會主事に就任された▼佐野卜占氏(瀨

州)「先生の初等講座を拜讀大變よい参考になりましたがなかなかうまい作れません。同好の戰友も出て来一緒に會でもやらうと誓つて居ります。生活が平凡だけに變つた風物に接しません故なかく作りにくいです。課題によつて勉強したいと思つて居ります」云々のたよりに接した

慶弔

▼米本貴志子氏(不朽洞會員)は十二月十二日に令孫さんを上るごばれた。慶祝。▼夷一笑氏(不朽洞會員)は十月十九日次男啓一君を儲けられた。お慶ひ申上げる。▼加藤藤兒(東京)洋書家で、「雪」時代の同人であつた同氏は十一月二十七日十二時三十分逝去された。謹んで悼む。▼佐二木千隠氏(長野縣上田温泉)は十月十五日薬石効無く逝去された。謹悼。▼阿部佐保蘭氏(東京)の嚴父市三郎氏が十一月九日急性肺炎で永眠された謹んでお悔み申上げる▼戸倉種雄氏(二等兵曹)は戸倉普天氏の慰問誌で本誌を愛讀されてゐたが、ソロモン第二次海戦で惜しくも散華された謹んで悼む。

轉居

▼武部香林坊氏(不朽洞會員)は大坂市東淀川區三津屋北通四丁目二九番地へ

改號

▼江口正路氏(尼崎)は千石と改號

寫眞説明

前列向つて右から池田秀峰 西島紋平・木下翠柳・高橋一 笑・村上默雷・中列岡本夫人・小林梅香・正岡義朗・小松一箇・岡本鏡蜂・岡本想・中井雅風・後列山本愛坊・清水凡々子・國近元祿・松浦帆休の諸氏

廻轉椅子



★皇紀は二千六百三年となつた。大東亞戰爭も是が非でも勝抜く覺悟の二年目だ。聖壽萬歳を壽ぎ奉り併せて皇軍將士の武運長久をお祈りする★本誌も素派らしい好評の連續で、二十周年の春を迎へたが、春といふのも名ばかりで、戦ふ日本の新文化昂揚の一翼として、寸時の休養もなく、羽搏いてゐる。本年も倍舊の御支援と御鞭撻をお願いしたい。★柳界の至寶「武玉川研究」が本誌に發表されたから既に十一年。本誌で二二六回目に及んだ。梅本屋山、森東魚、蛭子倉三氏の絶大なる勞を思ひ、誠を新にするに際して、その功績を讃し健康を祈るものである★戸田孤蓬氏の「川柳世界史」は新春のページを飾るため、少しく趣きを變へ、科學拾遺稿を挿入された。★西田柳樂氏の「草木徒然」は新春を壽ぐ草木に就て執筆された。

氏の「日おくれの夕刊」は輕妙な筆で描かれた好讀物である。★小山文三氏の「丹波の餅を語る」は時局柄、口を開けて讀まぬことである。★拙稿「初等川柳講座」は今回は新年吟に就て述べた。



★新春の好讀物としては恒例の特別原稿として「簡易生活」に就いて諸家に執筆を煩はした。★前號の表紙は壓倒的好評だつた。本號では北越の雪を滑る少國民を目前にけることとした。★印刷關係で特に締切を嚴守したため原稿並びに句稿の多數を次號に割愛したことを諒とされた。★大東亞戰爭滿一周年記念、戦ふ日本の師走川柳大會は十二月十四日、柳友諸氏の白熱的参加と各地柳友の聲援によつて盛會をきけられた。詳細は次號に譲る。(路郎生)



空襲に備へよ!
防空用品(七種)



大丸
電話南一三一

いのちある句を創れ



投稿清規
用紙は原用紙
用紙は原用紙
用紙は原用紙

川 堺支部句會 (堺)

十一月十八日 於波夢造居 角堂報
二日酔丸薬までも受けつけず
床上げて丸薬二三粒拾ひ
丸薬はおさて敷をよんでみる
お座敷へ丸薬まいたあわてよう
水薬を丸薬にして旅に出る
水は通つたが丸薬は残り
吐き出した丸薬色が變つて居
丸薬も揃へて乳母は暇をとり
急行車丸薬の敷よみきれず
命申をさした其後の自爆にて
命申を聞いてニッコリ息が絶え
命申をただ神かけて祈る兵
ア命申レキシントンの見納めた
命申を仲好し同志語りあひ
命申をどよめきで知る 櫻關室
命申の報有り六機歸り來ず
旗艦今軍港をたつ旗を上げ
徴用で軍港に來て兄に逢ひ
今朝見れば昨夜の響響姿なし
軍港へ歸れば將棋さす氣なり
軍港で見れば人日も海に落ち

川 尼崎支部句會 (尼ヶ崎)

十一月二十一日
奉仕隊牛をこわがるのに困り
奉仕隊鉢巻めたまま歸り

川 梅田支部句會 (大阪)

六甲越有馬路行
十一月十五日
山頂で 我が家のあたり 指をさし
配給のタオル湯の色染つてる
ケールを降りて秋風身に沁みる
湯の町が見えて紅葉の色映へ
ゆれる度網棚へ手をやる 大男
網棚へ今日の土蔵が乗つてゐる
神戸市がだんく大きくなる六甲
散る紅葉良寛さまを フト思ひ
落葉踏む寒さへ茶屋のしるこあり
晝飯の味にグルーブ 笑ひあひ
秋櫻砂防工事の土手に揺れ
五六人はしやいで巡査に叱られる
膠本へもう五六人待つてゐる
練成へ秋の風切る五六人
禿ましたなあと同期の五六人
五六人待たして結婚飯がすみ
五六人夜更けのホームに淋しさう

川 小郡支部句會 (山口縣)

十一月廿八日 於鐵道俱樂部 井蛙報
見世物が來て大祭の日が近い 游記

川 下關支部句會 (下關)

十一月七日 於市多樓居 半休報
鹽辛い味噌汁もある新世帯
早立ちの子へ味噌汁が熱い出来
味噌汁の味もいよゝ冬であり
隆膳に味噌汁もつぐ親心
言ひ取けた妻味噌汁を飯へかけ
味噌汁へ明治の母と向ひ合ひ
新調へ味噌汁吸ふたかたを付け
攻撃を露露の夢を見る勇士
新調が暫らく客をまつかせ
新調へ市の中心も移つて來
新調に國は強いと貨車の山
新調に國は強いと貨車の山
海陸空歩調も合つた勝ち戦
末席の心ゆるんで來た欠伸
緊張の中で手術のメスの音
號令を待つ全身をハリキらせ

川 豊中支部句會 (豊中)

配給の品だけでする村祭
お祭へそのけく、神輿が通る
丙種であつてお祭の世話掛
訓示する父の頭に霜があり
常會に部屋を退はれた居候
番犬も常會と知る下駄の音
纏まりも付いて常會お茶を入れ
非常時だ此處も女の渡し守
女ももうすつかり冬の仕度で來
臨終を知らせて醫者は時計を見
聖戦のかたみに残すこの時計
待合所時計が客を並ばせる
乗り後れ驛の時計も修理中
御立派でしたと遺品の時計着く

早口で看護婦言傳云ふて行き
早口で追かけて行く汽車の窓
飛行機の影はハイクの山を飛び
飛行機は號外まくと子は思ひ
飛行機の威力を知つた時沈み
懺悔(ユニオンジャック)又あはて
豊作の田を飛行機の影が伸び

三池染料支部句會 (大牟田)

十一月二十八日

藪人報

常會を臨時ニュースがだまらせる
常會はいつも賛成するところ
常會へ隣の猫も混つてあ
勝ち抜こう意氣常會に異論なし
相談をしますと部長謙遜し
常會へ軍人堅氣もてゝある
驚いたバスより鶏が向は慌て
鶏鳴いて〜故郷の朝が明け
鶏の目に此處の畑は眞ばかり
ポイントはそのまゝ始發驛ホーム
ポイントへ待て〜赤い旗あがる
めざましを握つた儘に又眠り
押賣りの種幕軽く捌いて居
種幕へ待たせて置けの應接間
種幕へ困巧な妻は詫をする
種幕へ眞の時局を説き聞かせ
抱逸

四ツ橋支部句會 (大阪)

十一月二十七日

藪芳報

山道を牛一ばいに巾をととり
道しるべやつと見付けた登山口
頼母子へ落しとない札を入れ
頼母子の金とは言はず返しに來
頼母子をあてに借金嵩を増し
配給の茄子で故郷思出し
若鷺は故郷の空で二度廻り
不幸者故郷の母が夢に立ち

墓石の話に故郷へ歸へるなり
あの川も橋も變りのない故郷
飯盒の飯で一家の睦じさ
行軍の後に楽しい飯盒めし
恢復が近づき果物減つて行き

神津支部句會 (大阪)

十一月十四日

於嶺泉居 香林坊報

巻紙に菊花も添える慰問文
巻紙へ近代娘ピンと來ず
巻紙に細々と書く母の文
巻紙は不得手で少し禮を缺ぎ
巻紙で禮状を出すおもてなし
巻紙を手に用件は妻に聞き
由良之助うつかり開く七段目
絶筆となる巻紙の墨の色
巻紙に書く手を持つて無沙汰をし
詰將棋鼻唄が出て王手なり
鼻唄であけさせた戸に父が居り
鼻唄を馬に聞かせてある夕陽
野良歸り鼻唄も出てよくみのり
鼻唄のゆとりもあつて米をとぐ
鼻唄で其の日の苦勞消すつもり
種入れの嫁も小聲で唄つてあ
ふん〜と皆芝開かず損をする
早合點一度にとつと笑ひこけ
似た人の肩をたいて詫言を云ひ
六感が働き過ぎて汗をかき

松江支部句會 (松江)

八歩氏を讀んで

於岩城旅館 將雄報

最前線明日を忘れた銃を取り
千柿の都に馴れぬ色で着き
最前線へ送る豫算の吊し柿
最前線行ける日を得つ誓ををり
最前線銀笹舟ともをなき拂ふ
唯貯金する樂しみの無缺勤

におびえ握手の手をはなし
最前線名残のタバコすひ廻し
名も知らぬ神様も居る神在月
千柿をつらり並べて秋稔る
來客へ里の千柿味となり

津山支部句會 (津山)

十一月十二日

於津山車壁區 一將報

山水畫土橋が一つ書いてあり
溪流の吊橋からの秋を褒め
乗越は鐵橋へ来て目を覺し
はつかしいけれど手を取る丸木橋
彦九郎橋の去來が目に入らず
水車あり丸木橋あり俺の村
あの橋で別れてからの世に揉れ
おつかない橋が渡つて見たくなり
意見されたがら塵毛むしつてあ
青疊結ふた島田がうつるやう
見舞客疊の上をそつと行く
この時節疊で死わる果報者
古疊程のほこりが出る身なり
木炭の配給疊の数もいり
畫飯へ疊に針を投げて立ち
疊替子供は外で遊ばせる
資材難案山王大事にしまはれる
甲種合格二十一年の用意あり
不用意へ親方苦きつただけ
前線を信じて族の小屋に生き
風呂敷の芋を土産に祭客
増産の一役買つた薩摩芋
芋粥も御馳走振りと箸を取り
姉さんがそつとたのむは芋のこと
芋虫の何處まで行くか日の盛り
親手を抜けば芋手がついて來た

鎌川支部句會 (出雲)

十一月三日

於さわだ居 綠之助報

茶柱が立つてあれこれ考へる
日なたほこ椽先に匂ふ茶の香り
その希望夢に近しと笑はれる
何時やらと同じ夢見に氣味悪し
働けた幸一周年を振りかへり
御近所の様子も知れてもう一年
一周年あの軍艦マーチあの決意
勤勞の奉仕で出來た炭もあり
木炭も行儀に積んで新世帯
裏口へ廻れば炭をすゑてあ
製炭へ明ら〜と奉仕隊
配給車木炭こぼして又走り
裏長屋同んじ井戸で御挨拶
朝の茶へネクタイを締め直す
裏口で呼んでるやうな秋の風
化粧する女の足の黒いこと
い〜夢を見たとい〜朝が出る
慰めの言葉も盡きて茶をすゑり
久方の袴吉日のお茶に座し
炭を切る早い寒さをこぼしつゝ

阪大川柳會 (大阪)

十一月廿五日

於會議室 利生報

故郷からの縁を断る交換手
撤退の最後の一人交換手
交換手たしなみ程は匂はせる
交換手屋敷で足りる田舎町
交換手のと巻いてある壁を出し
交換手今のは關だなと思ひ
指切りをしたに今宵は水枕
盲腸炎小指程かと主治醫云ふ
種明し小指の動き見よと云ふ
小指立てられる程御察人きかして
小指とも妻ともつかず女中居る
久し振りに遣へば我子の征た話
またしても車下をするなり脊の低さ
夜業服はたけば月がまんまるし

その織娘望まれ苦勞たえぬ姉
マスクして居ても織娘は争へず
看護婦の織娘此處にも落付けず
同 鏡々

大阪警察病院川柳會 (大阪)

十一月十日 正柳報

役人の古手儲ける聲でなし
役人のお世辭を云ふは辭めるころ
役人の机上論だと愚痴も出る
南方を指して役人腰を上げ
わたらも役人ダスと米屋来る
浪人をして下役としたしめり
保安課長と聞いてそれからもてる事
難任をば 新聞社まで 告げにゆき
役人へ簡素化と云ふ聲寂し
役人と氣付いてからの世辭となり
役人は 法規抱へて 明日にさせ
うたたわを 破る略血神もなし
轉腰をしても十八よいポーズ
轉腰に スタンドの灯は 忘れられ
そんなとこで 寝んと寢床へ入なはれ
轉腰の間に 長い夢を見た
解つてるよと 轉腰風邪を引き
轉腰のやうに 敵兵倒れてる
似顔畫見本に 首相描いて居り
挨拶は 南の土になるといひ
親譲りの 短氣獅子で 火花散る
飲まされりや 飲めますと いふ親譲り
親譲りの 生地ですわと 囁られる
利氣を親譲りだんなど 括めて去に
學生で 初段をすすも 親の子か
親譲りと 知つては いるが 暢氣すぎ
親に 似て 出歩くと ことまめなこと
強いて 云へば 中風だけが 親譲り
親譲り ひとつは なしに いくる口
親譲り やつぱり 藪馬 やつて みる
そう云ふ 千子の のろいの 親譲り
道郎

大阪遞信病院川柳會 (大阪)

十一月二十七日 於圖書室 没食子報

お父さんをつくりやとはと女將云ふ 正朗
あきらめてますわと女将をする 竹莊
せめられて 咳で 飛はした 粉薬 司白
薄聴へいらく させる 咳が 飛び
聴診器 しばし 患者の 咳を まち
本題に これからは いる 咳 拂ひ
ひつつた 様な 咳して 催促し
寝れ方 唯の 咳とも 思はれず
咳すれば 屁も 出る 父の 古種近し
親の 咳子の 咳師 走押 迫り
あり難い 話に 咳を のみ下し
同姓の 手紙 舞込む 町に住み
似た人も あるなと思ふ 待呆け
一網打盡 人違ひなど 聞いてみず
腹む目の 言譯もする 人違ひ
人違ひとも 角刑事 ことと云ふ
ムツとした 顔が ぶり向く 人違ひ
湯氣の中見 知らぬ人が お低頭をし
悔は まだ 今に残る 人違ひ
人違ひでせうと あつさりか はされる
歸還して 女の 帯の 美しさ
應召の 時には 既に ユワタ 帯
叱られて 寝る べく 子供 帯をとく
寒稽古 腹帯 けた よい男
帯メを くわへて 女電話 口
劍劇も 帯かほりて 幕になり
七五三 背中 帯が 獨占し
正装の 帯が 邪撃する 汽車の旅
失戀へ 燕脂の 帯が 目に 残り
ワンピースの 帯切れ かに 肥えた まひ
繩の 帯都へ 送る 炭を 焼き
赤人の 歌が 繪になる 晝夜 帯
往復に 擦切る 帯も たつと けれ
もう 派手が 知らんと 好きな 帯をしめ
竹莊

もしほ川柳會 (因島)

十一月十五日 一滴報

帯燃えて 二尺の 袂嫁き 連れ
ようこそ 帯を 巻きく 顔を出し
捷かな 負けた 國には 陽は 照らす
男子 出生 候文で 喜ばれ
捷ては 弾みおとせば 姿むはらから かく
練成か 近頃 徒歩で 勤めに 出
あてに 高う ついてと 上戸 腐つて 居
間違ひも つくり ちゃ 晝儲けて 居
方正
苦しみと 惱みの 底は ぬけて 語り
隣組 咲いた 朝顔 同じ 色
新調の 服に 埃が 氣にかゝり
末の 娘も 鏡が みたい 歳になり
昔日の 面影も なし 世話 女房
青年を 指導する 身の 髪を きり
背戸の 桶 然れ ますか と 子の 便り
捧げるに 未だ 馬が あり 畑を 打つ
公報に 覺悟は ありし 友の 母
乏しさに 慣れて 感謝の 日を 送り
菊の花 君が 御禮 威を 咲き ほこる
捷つ 國の たゞ ありが たく 菊 薫る
眞珠 濁菊を 戴く 腕を見せ
菊も 良し 酒も 亦よし 友は 征く
菊 薫る 九段へ 孫に 手を ひかれ
立ち 割つて みたし 闘病 百餘日
紋平
得意氣に見 へる 眼鏡 は はずしとき
貴婦人の 眼鏡 つめた いものに見 へ
子の 眼鏡 文の 眼鏡 と ならべられ
フエルトの 恩師 眼鏡 が よく 似合ひ
萬歳へ 母も 一度 伸び があり
補助 椅子で 娘 眼鏡の 玉を 拭き
伊達 眼鏡 變な 處で 出して かけ
岸子

あざみ婦人句會 (大阪)

十一月十八日 秋子報

生得意氣に見 へる 眼鏡 は はずしとき
貴婦人の 眼鏡 つめた いものに見 へ
子の 眼鏡 文の 眼鏡 と ならべられ
フエルトの 恩師 眼鏡 が よく 似合ひ
萬歳へ 母も 一度 伸び があり
補助 椅子で 娘 眼鏡の 玉を 拭き
伊達 眼鏡 變な 處で 出して かけ
岸子

オムニコン

非特異性全免疫元

心臓の強い男の色眼鏡
働きにゆく身に母が居てくれる
私の強い手へ母として悩みもち
軍服で母の笑顔の前に立ち
里歸りうれしく母の肩をもち
母だけがまともな嘘を信じて
針針針母もせはしく纏ひつづけ
母さんへ辨當箱を ポントほり
生みの母育ての母の仲で生き
歸の灯に母を待たせて地圖を買ひ

民子
くみ子
秋子
同
千代
K子
夏子
ひさみ
花子
里枝

本剤は非特異免疫學說
に準據して高度の免疫
力を有する異種蛋白、
リポイド及び脂肪を主
体とせるものなり。

(適應症抜萃)
液感、各種肺炎、肋(脇)膜
炎、扁桃腺炎、中耳炎、産
褥熱、其他各科、急性、熱
性、炎衝性、傳染性、敗血
性、並に化膿性諸疾患に對
し廣汎に涉り著効を奏す。

(特長)
注射無痛、副作用絶無、用
法簡單、發効迅速、價格適
廉。

(包裝)
二cc(2)管入 二cc(2)管入
一cc(1)管入 一cc(1)管入
一cc(1)管入 一cc(1)管入
一cc(1)管入 一cc(1)管入
發賣元 株式会社黒田藥品商會
大阪・東京

— 星 驗 試 文 —

麻生路郎著

新川柳評釋

定價〇・八〇
一〇八

本筋の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治

隨想集 詩人複眼

定價一・〇〇
一〇〇

川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高麗亞純のペンネームで「川柳雜誌」に發表されたもの。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫

果卵の遊び

定價一・〇〇
一〇〇

名句に名評釋がしてあり、點例となる句が深山蒐めてある。漫畫三十二張挿入。

戸田孤鋒著・麻生路郎序

柳川二千六百年史

定價〇・九〇
一〇八

著者一人の創作・諷史川柳の尖端をゆく。街の雑音(賣切) 大 空(賣切) 人の一代(賣切)

二八一丁二通岸海島出市堺

洞 朽 不 所行發

番二九三〇三阪大替振

胃腸 脚氣 榮養 疲勞



強力メタボリン錠

法療位單高のB₁・V

本劑は、その含有する強力且つ高單位のV₁・B₁によりV₁・B₁缺乏に基因する胃腸疾患、食慾不振、榮養障礙、脚氣、劇務による疲勞に用ひて、優れた効果を發揮す。
一錠中のV₁・B₁ 一〇〇錠含有量C・五冠 (裝包) 一〇〇錠

製造發賣元 大阪 株式会社 武田長兵衛商店

41(2)507



のた めに

片瀨醫學博士述

「安産のために」冊子呈上

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

榴林醫學博士 推獎
片瀨醫學博士 監查



ブダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

鍊成の

摩耶六甲へ

君と僕

神戸から大阪へ

大阪から神戸へ

待たずに乗れる

阪 神 電 車

りとびきに



の等虫京南・蚊・蚤
! 時いユカで虫毒

美び顔が水す

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。
★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧! ぜヒお勸したい薬です!



是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	.

阪大・京東

館天順谷桃

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行) 定価金三〇銭 送料壹銭